

国立国語研究所学術情報リポジトリ

抽象的関係を意味する動詞の用法： 言語情報処理のための動詞句の分析・その3

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2017-03-31 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 石綿, 敏雄, ISHIWATA, Toshio メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00001030

抽象的関係を意味する動詞の用法

——言語情報処理のための動詞句の分析・その3——

石 綿 敏 雄

0. 概要と結論

これは、昭和45、46年度文部省科学研究費による総合研究（A）「日本語の電子計算機処理のための基礎的研究」（代表者岩淵悦太郎）に関する報告の一つである。

この研究は動詞の用法を中心に、日本語の用語および文法を総合的に記述することを目的としている。そのことが、日本語の文の構造を機械的に認識するために必要であるからである。日本語の文の構造を機械的に認識するためには従来の国文法のように、単に構文的事実に限ってこれを追求するだけでは不十分であって、語彙論的事実ことにその意味用法に関する事実も関連してとらえてゆくことが必要である。したがってそのための調査研究は、従来のように語彙論と文法論の立場を峻別するという方向でなく、これをあわせて総合的に記述することになる。

このような立場は、ことばの機械処理という応用的な立場から要請されるのであるが、このことは単に応用的な立場にとどまらず、言語研究の一般的な態度としても認められるものであって、最近の文法理論が同様にこのような見方をしていることからも、首肯されることであろう。

この研究は報告46に発表した「助詞『に』を含む動詞句の構造」を出発点とし、「に」でなく「が」を中心とした立場をとっているが、他の格助詞との関連にふれることに努力を払っている。いわば主語格を中心として、総合的な動詞などの dependency あるいは Valenz といわれているものにふれてゆきたいと考えている。

前回の「に」の分析では、主として新聞用語調査の結果が用いられているが

今回の調査では前記科学研究費補助金で作成した用語総索引「三四郎」をよく使用している。すなわち、新聞用語調査の毎日新聞夕刊半年分と、「三四郎」のなかから、助詞「が」の用いられているばあいを取りあげて基本データとし、これを分類したのが今回の研究である。これに、「三四郎」のなかから、他の格の用法をひろい出して付し、また「が」でなく「は」「も」などの助詞を伴なっているばあいもあわせて取りあげた。計量的な調査記述の見地も加えて、「が」の格のばあいは原則として用例を省略せずにあげた。用例数が、さきにあげた資料のなかでの使用度を表わすと考えてよい。ただし他の格や、「が」でない（すなわち「は」「も」など）ばあいは、助詞に隣接して現われているばあいのみを取りあげ、時に省略している（省略のばあい、そのようにことわってある）。他の格、「が」でないばあい、は時にそのようにことわり、時に「他の例」として示した。これは「人間の精神活動を意味する動詞の用法」「自然現象を意味する動詞の用法」および本論文のすべてについて共通である。

この研究は本来述語句の構造、あるいは述語の構造を解析しようとしてはじめたものである。述語をその成立要素から

動 詞

形容詞・形容動詞

名詞+copula

の三者に分けると、そのなかの動詞の部分を取り扱おうとするのである。そして動詞を、「分類語彙表」の区分に従って

抽象的関係

精神および行為

自然現象

の三者に分けて、これをひとつひとつ取りあげてきた。本編はその第一の部分である「抽象的関係」に属する動詞を取りあげているのである。次の二つはすでに取りあげて「人間の精神活動を意味する動詞の用法」(国語研報告 49 所収)および「自然現象を意味する動詞の用法」(国語研論集 4 所収)として発表した。したがってこの論文をもって一応動詞の用法を概観するしごとを終わることに

なる。

次はこのことを土台として、動詞の用法を中心としてみた、動詞名詞などの用語の分類記述であると思われる。これは語彙論のなかでも最も重要なしごとの一つであり、言語情報処理の基礎的研究と語彙の調査研究とが、眞の意味で結びつくところであると考えられる。さらに、形容詞・形容動詞のばあい、および名詞＋コピュラのばあいも取りあげて、述語句の構造を概観することも必要である。

この論文で用いた方法について概略をしるしておこう。

言語情報処理における、構文の pattern recognition に用いることが第一の目的なので、述語句の構造をその立場から解析することになるが、まず表層構造に目をつけて、「が」「を」「に」などの格を中心として、動詞の Valenz を記述してみたのである。単にいわゆる Valenz だけではなく、そこに用いられる用語の性質についての記述を、できるだけ行なってみようとしている。このような態度は、ソ連の文法研究、テニエルの valence の研究などをへて C. ローレルの生成文法などの記述をまとめたものに近く、この三つの論文を書きすすめるうちに、次第にその立場がつよくなっている。このあとでどのような生成の、あるいは Computerlinguistik の立場からいうと処理の手法を考えるかは、これからの筆者の課題である。

データは前にしるしたとおりであるが、その作成と使用しやすい形をつくるにあたっては、筆者が別に作成した用例つき用語総索引作成プログラム“COBOL-KWIC”を使用した。この処理はなお続いており、さらにデータをふやすことができる。たとえば「行人」や「硝子戸の中」の索引もほぼできているが、この分析がかなり前（昭和 45 年度）からはじめられたため、そのときに完成していた部分しか使用できなかった。データ量の点でいっても、方法の点からいっても、本編はいわば中間報告である。用例の型がこれ以外にないわけではけしてない。

データは前記「三四郎」と「毎日新聞夕刊半年分」であるが、用例は

○ 三四郎

△ 每日新聞夕刊半年分

で示した。「三四郎」の例は原表記に忠実でない。

本編は筆者がフランス国立科学研究所(CNRS)招聘研究員として、遠く異境の地にあって、分析記述したものである。このため、参考すべき論文をおとしていることが多いと思う。ご教示いただければ幸いである。

この論文で得られた結論は次の通りである。

このグループに属する動詞にはかなり多くの異なった性質のものがあるが、全体としてみると、他動詞の主語は主として人であり、自動詞と他動詞が用法上呼応するばあいは、自動詞の「が」の前の名詞と他動詞の「を」の前の名詞とは呼応することである。用法を分析してゆくと動詞の意味上の特徴と、それにかかる名詞の意味上の特徴が、相応じている現象が数多くみられる。

その他さらにくわしい点については、2. 全体の見渡しと問題点に述べた。より一層くわしい記述は、次の 1. 抽象的関係の動詞の用法のいちいちのなかで見ていただきたい。

1. 抽象的関係の動詞の用法

前節に述べた要領により、大体「分類語彙表」の順序にしたがってなべた。単語の索引は別に作成する予定である。

(1V-1) 「関係」を意味する、2. 111 の動詞。「かかわる」「関する」「よる」「つく」など。これらの動詞は主として助詞「に」について、その名にある名詞をこれらの動詞に続く名詞あるいは動詞と連絡させる役割りを果たす。動詞に続くときは「関して」「よって」、名詞に続くときは「関する」「よる」などの語形をとる。

○三四郎もこの問題に関しては、もう与次郎の責任を忘れてしまった ○与次郎はその時始めて、美弥子に関する不思議を説明した ○与次郎のいうところによると ○聞くところによると ○野々宮君の話によると ○時と場

合によるとなんでもいう ○広田先生の評によると ○野々宮君の返事によると ○こじきについてくだした広田のことば ○与次郎は又この晩、原口さんを先生の所へ連れて来たことに就いて、弁じ出した ○野々宮は行く事にした。行くと極めたに就ては、三四郎に依頼〈たのみ〉があると云い出した ○野々宮君はかのひめいちについていろいろなことを質問した ○ふたりがひめいちについて問答をしているうち ○妹に対して不親切になる ○昔の偽善家に対して、今は露悪家ばかりの状態にある ○丁度亞米利加人の金銭に対して露骨なのと一般だ ○三四郎も広田もこれ（与次郎のことば）に対して別段の挨拶をしなかった ○ただ事実として、他の死に対しては、美しい味があると共に、生きている美弥子に対しては、美しい享楽の底に一種の苦悶がある ○三四郎はこの微弱なる「この間は難有う」という反響に対して、確乎〈はっきり〉した返事をする勇気も出なかった ○三四郎は、この批評に対しても依然として「そう云う訳でもないが……」を繰返していた ○ただ帽子を取って礼をした。与次郎に対しては、あまり丁寧過ぎる。広田に対しては、少し簡略すぎる ○文学者が文学に対してくだした定義 ○ペークンの 23 ページに対しても甚だ申し訳がない ○非常に嬉しいものに対して恐を抱く所が矛盾している ○三四郎はよし子に対しては礼を述べておいた ○この男に対する態度もきわめて不明瞭 ○三四郎は四人の乞食に対する批評を聞いて ○未来に対する自分の方針 ○三四郎はこれが為めに独逸語に対する敬意を少し失った様に感じた ○三四郎は腹の中で美弥子の自分に対するそぶりをもう一度考えてみた ○自分が野々宮に対する程な尊敬を美弥子から受け得ないのは当然である ○今日まで美弥子の自分に対する態度や言語を一々繰返してみると ○あたかも毎日銀行へ金を取りに行きつけた者に対する口振りである ○三四郎はよし子に対する敬愛の念を抱いて下宿へ帰った ○まるでこどもに対するようである

以上のうち最後の数例はたとえば 2. 35 (人間の行動のうち、応接) 的である。このクラスに入れない方がよいかもしだれない。これらの動詞がかかって行く名詞も「尊敬」「そぶり」「態度」「口振り」「敬愛の念」のように、人間の精神活

動を意味する名詞であり、これらの動詞の前の「に」の前にある名詞も「自分」「野々宮」「者」「よし子」「こども」のように人間が来ている。ただそれ以前のものと連続的な面があるので、2. 35 の方に入れなかった。

このグループ (2. 111) の動詞全般に対しては、一般に語数の制限はあまりあるとはいがたい。どちらかというと形式的な意味が、これらの動詞の一側面として強く出ているからである。

のことから、この種の動詞の取り扱いについては、言語情報処理の目的によつては、これを一つの動詞として処理せず、「に関して」「に関する」「について」「についての」などの形全体をもつて、一つの処理単位として扱うことを考えてもよいと思う。

(1V-2) 「異同・類似」をあらわす 2. 112 の動詞。「似る」「ちがう」「異なる」「似合う」など。まず「似る」の例。

○その字が野々宮さんのポケットから半分はみ出していた封筒の上書きに似ているので ○その女の顔がどこか美弥子に似ている ○野々宮君は只はあはあと云つて聞いている。その様子が幾分か汽車の中で水密桃を食つた男に似ている ○一番に到着したものが、紫の猿又を穿いて婦人席の方を向いて立っている。能く見ると昨夜〈ゆうべ〉の親睦会で演説をした学生に似ている ○……五十あまりの婦人が三四郎に挨拶した。……顔は野々宮君に似ている ○自分の頭の早に往来する女の顔はどうも野々宮宗八さんに似ていないのだから困る ○先生は顔を後へ捩〈ね〉じ向けた。髭の影が不明瞭にもじやもじやしている。写真版で見た誰かの肖像に似ている ○イブセンの人物に似ているのは里見のお嬢さんばかりじゃない ○苟〈いやしく〉も新しい空気に触れた男はみんなイブセンの人物に似た所がある ○「君はあの人をイブセンの人物に似ていると云つたじゃないか」「云つた」「イブセンの誰に似ている積りなのか」 ○西洋画の女の顔を見ると、誰の描いた美人でもきっと大きな眼をしている。可笑〈おか〉しい位大きな眼ばかりだ。ところが日本では観音様を始めとして、お多福、能の面、もっとも著しいのは浮世

絵にあらわれた美人、悉く細い。みんな象に似ている ○兄に似て首の長い女である ○ハムレットは一人しか居ないかもしれないがあれに似た人は沢山いる △中江さんの声が東山さんと、とても似て

「似る」の基本用法は「AがBに似る」の形で、AとBが等しい語類になるのであろうが、実際にあらわれたものは上のとおりで、特に「Bのなに」のなにの部分が省略されているものが多い。筆者が以前に「……のx」と称したものである（報告31）。「あの人を…似ているという」の「を」は下の「いう」が影響を及ぼして変形が行なわれたものであろう。「兄に似て……」は連用の、「あれに似た人」は連体の変形例で、基底構造は同じとみてよからう。次は「違う」の例。

- a. ○玄関には美弥子の下駄が揃えてあった。鼻緒の二本が左右で色が違う
○なぜ東西で美の標準がこれほど違うかと思うと
- b. ○熊本の教師とはまるで発音が違うようだ ○円遊も旨い。然し小さんとは趣きが違っている ○自然に背〈そむ〉いた没分曉〈ぼつぶんぎょう〉の事を企てるのとは質〈たち〉が違う ○イブセンの女は露骨だが、あの女は心〈しん〉が乱暴だ。尤も乱暴と云っても、普通の乱暴とは意味が違うが
○その女の顔がどこか美弥子に似ている。能く見ると目付きが違っている
○広田先生は例に依て煙草を呑み出した。与次郎はこれを評して鼻から哲学の烟〈けむり〉を吐くと云った。成程烟〈けむ〉の出方が少し違う △せんべいとは少々わけが違う △大行事とは社会的質が異なってくる
- c. ○自分と野々宮を比較してみると大分段が違う ○今の自分とこの男を比較してみると、まるで人種が違う
- d. ○三四郎は二日目の切符を持っていた。与次郎が広田先生を誘って行けと云う。切符が違うだろうと聞けば、無論違うと云う ○偉い人も偉くない人も社会へ頭を出した順序が違うだけだ ○よし子は余念なく眺めている。広田先生と野々宮はしきりに話しを始めた。菊の培養法が違うとか何とかいう所で、三四郎は外の見物に隔てられて、一間ばかり離れた △互に役者どうしただ格が違うだけで △第一顔色がちがう △軽さが違います ○曙町

へ来ると大きな松がある。この松を目標〈めじるし〉に来いと教わった。松の下へ来ると、家が違っている。

以上のなかで、a.は（……の間）でちがう、b.は……とは……がちがう、c.は比較してみると……が違う、d.は……がちがう、のように、文型にやや区別があり、d.のなかには多少用法が変っているように考えられるものもある。このように「ちがう」は全体として「似る」とは文型がことなるが、

○（広田先生は）……呑気な事である。与次郎の呑気とは方角が反対で、程度が略〈ほぼ〉相似している

などは類似の構造をもっている。このグループにはこのほか、

○三四郎が広田の家へ来るには色々な意味がある。一つは、この人の生活その他が普のものと変っている ○いつもの三四郎に似合わぬ所作である ○与次郎に似合わぬ事を云った ○その内で広田先生はのろいに似合わず一番に腰を卸してしまった ○常住の吾身を観じ悦べば、六尺の狭きもアドリエーナスの大廟と異なる所あらず ○我々はこの自信と決心を有するの点に於て普通の人間とは異なっている △風がいままでの扇風機と異なりなど「…が……に似あう」「……が……と異なる」「……が……と変わる」のような構造を基底にもっている。

(1V-3)「包摶」関係の動詞 (2. 113), のうち「着ける」「脱ぐ」など。他動詞で人間が主体。助詞「を」の前に衣服を示す名詞がくる。この類はもともと2. 333に合わせた方がよからう。

○神主が装束を着けて ○夜が明ければ常の人である。制服を着けて、帳面〈ノート〉を持って、学校へ出た ○そのうちの袴を着けた男が入場券を受け取った ○袴を着けて、与次郎を誘いに、西片町へ行く ○三四郎は着物を脱いで、風呂桶〈おけ〉の中へ飛び込んで、少し考えた ○着物を脱ぎ換えて膳に向かうと ○椅子には脱ぎ捨てた羽織を掛けた ○三四郎は靴を脱ぐのが面倒なので ○先生がさっさと脱ぎ捨てた洋服
ただし、次のような用法もある。前者はひゆ的、後者は一種の expression であ

る。

○三四郎は脱ぎ棄てた過去を、この立退場 〈たちのきば〉の中へ封じ始めた

○発車間際に傾狂な声を出して、駆けこんてきて、いきなり肌を抜いだと思ったら、背中に御灸の痕が一杯あったので

(1V-4) 「包摶」関係の動詞 2. 113 のうち、「包む」「こうむる」「かぶる」「かぶせる」「かむる」「くるむ」など。他動詞は人間が主体であり、「こうむる」も主として人間が主体である。

○男は返事をしづに外套の隠袋 〈かくし〉から半紙に包んだものを出した

○散々食い散らした水蜜桃の核子やら皮やらを、一纏 〈まと〉めに新聞に包くくるんで、窓の外に抛げ出した ○三四郎は、被っている古帽子の徽章の痕が、この男の眼に映ったのを嬉しく感じた ○頭には高等学校の夏帽を被 〈かぶ〉っている ○頭に新しい茶の中折帽を被っている ○学期の始まり際なので新しい高等学校の帽子を被った生徒が大分通る ○黒い帽子を被って、金縁の眼鏡を掛けて ○あの古い帽子を被って ○出て来る人物がみんな冠を被 〈かむ〉って、沓 〈くつ〉を穿いていた △いすれも黒人が白人娘の仮面をかぶって ○望遠鏡の先にかぶせてあるものを除 〈の〉けて「包む」「くるむ」は、紙、きれなどの名詞に、「に」「で」がついた補語をとる。つつまれるものは「を」格になる。「かぶる」「かむる」は、「帽子」「冠」などを「を」格でとり、「頭に」の格をとることもある。「こうむる」は「スタンダード和仏辞典」(以下和仏と略称)では、「おかげ」「ご恩」「損害」「不興」「ごめん」など。

○あまり与次郎の感化を蒙 〈こうむ〉らない

なお、次のような「包む」の用法は日本語としては本来的なものではなかろう。

○風が女を包んだ ○枯れた木が、音なく冬の日に包まれて立っている
次のような用法は「かぶさる」と同様であろう。

○その眼には暈 〈かさ〉が被 〈かか〉っている様に思われる。

(1V-5) 「包摶」の動詞 2. 113 のうち、「浴びる」「沿びせる」など。主体は人間。

○与次郎は共同水道栓の傍に立って、この夏、夜散歩に来て、あまり暑いから此処で水を浴びていたら、巡査に見付かって、擂鉢〈すりばち〉山へ駆け上がったと話した △南ベトナム政府軍の飛行機が繰返し低空爆撃を浴びせ△日産自がともに朝方売物を浴びて

「を」格の前には、「水」「湯」など。ひゆ的に質問、非難、ほこり（あびる）、光、砲火、一太刀など（和仏）。

(1V-6) 「包摶」の動詞 2. 113 のうち、「かざす」。主体は人間。「を」格は「うちわ」「手」。そのほか「小手」（和仏）、「ふりかざす」は「刀」など（和仏）。場所を「に」格で示すことがある。

○あの女が団扇を翳〈かざ〉して ○あなたは団扇を翳して高い所に立っていた ○ことに美弥子が団扇を翳して立っている構図は非常な感動を三四郎に与えた ○描かれつつある人は、突き当りの正面に団扇を翳して立った ○この団扇を翳して立った姿勢がいい ○団扇を翳しているところはどうでしょうと云うから ○団扇を翳して立った姿そのままが既に画である ○女の一人はまぼしいと見えて、団扇を額の所に翳している ○三四郎は胡座〈あぐら〉をかいて、鉄瓶に手を翳して、先生の起きるのを待っている ○始めは火鉢へ乗りかかる様に手を翳していたが ○美弥子は額に手を翳している ○半町程くると提灯が留っている。人も留っている。人は灯〈ひ〉を翳したまま黙っている。三四郎は無言で灯の下を見た

次の例は表層構造で「は」になっている。

○団扇はもう翳していない

(1V-7) 「包摶」の動詞 2. 113 のうち、「はさむ」「はさまる」。他動詞の主体は人間。前に「間」など動作の行なわれるところを示すことばと「に」が来、はさまられるものは「を」で示される。受身、自動詞のばあいは「が」の前に、「は

さむ」の「を」の前のことばがくる。

- 銀行の通帳と印形を出して、女に渡した。金は帳面の間に挟んだ筈である
- 画筆〈ブラッシ〉を指の股に挟んだまま ○耳の後ろに洋筆軸〈ペン〉軸をはさんでいる △原型をとどめていない胴体の部分がはさまれており ○下駄の歯が鎧に挟まる。

(1V-8) 「包摶」の動詞 2. 113, 「含む」「含める」など。他動詞であるが、主体が人間でない使い方があり、多く用いられる。

○静かな長い時間が含まれているように思われた △いっさいが含まれております ○帯の感じには曖昧がある。黄を含んでいるためだろう ○よし子は画筆〈えふで〉に水を含ませて、黒い所を洗いながら「含む」などの用法については「スタンダード和仏辞典」にすぐれた分析がみられる。「口に含む」ばかりは主体が人間、「心に留める」「恨みをいだく」ばかりも人間であるが、「内部にもつ」ばかりは、主体が人間でない。たとえば「この礦石は金属分を多量に含んでいる」など。

(1V-9) 「包摶」の動詞 2. 113, 「まじる」「ませる」「かきませる」など。「ませる」の主体は人間。「まさる」はさまざまの主体がありうる。

△ひねくれた男「南利明」がまじっていた ○手紙には新蔵が蜂蜜をくれたから、焼酎を混せて、毎晩一杯ずつ飲んでいるとある ○三四郎はこの三つの世界を並べて、互に比較してみた。次にこの三つの世界を搔きませてその中から一つの結果を得た。

(1V-10) 「存在」の動詞 2. 120。「ある」「いる」「存する」など。一般的に「ある」は主語は inanimate, 「いる」は animate といわれている。そして全体的にみてそうであるが、多少の例外がある。ことに「ある」のばかりにおいてそうである。これらは自動詞で、「を」はとらない。存在する location を示すために助詞「に」はよく用いられる。「ある」については「である」、「いる」について

は「て^るいる」のような補助用言的な使い方が多いほか、「ある」について「……
する^ることがある」「……した^ることがある」「……(の) ところがある」「……のば
あいがある」などの expression が、高い使用率で現われる。

「ある」の例。名詞の分類語彙表の番号で排列。

【抽象的関係】 ○青竹の中に何があるかほとんど気がつかなかった ○机の
上には何があるかわからない △連続四件の放火事件があった △脅迫や乱
暴の事実があったかどうかを追及 ○広田先生の話し方は、丁度案内者が古
戦場を説明するようなもので、実際を遠くから眺めた地位に自らを置いてい
る。それが頗くすこぶる樂天の趣がある ○「君、この辺に貸家はないか。
……」……「どの辺だ。汚なくっちゃ不可くいけないぜ」「いや奇麗なのが
ある。」 ○大きな石の門の立っているのがある ○心中だってなかなかおも
しろいのがあるよ ○おもしろいものがありようはずがない ○この上には
なにかおもしろいものがあって △そして非常にはげしいものがある ○広
島より京都の方が安くいいものがある ○三四郎の心を動かすものがあ
る ○向う側の隅にぱっと眼を射るものがある ○その時から与次郎はこの
桜の木の下が好きになって、何か事があると、三四郎を此処へ引張り出す
○なにないことがあるものか △ぼくを可愛がるといいことがあるんだって
○大変親切にされて不愉快なことがある △ベトナムにおいて力にゆずること
があれば、○うんとのびをすることがある ○なにかおもしろいことがありますか」といって ○ふしぎなことがあるんだが ○いつまでも要領を得
ないことがある ○熊本にいた時分にこんなことがあった ○なるほどそん
なことがあったかもしれない ○実際どんなことがあったかは想像できない
△仕送りをしなければならないようなことがある △軽率に実行するような
ことがあってはならない ○活字で一行ずつに書くことがある ○時々女房
をまきでなぐることがある ○君に話すことがある」という ○ふ
とった画工も動くことがある ○女がいなければ書くことがたくさんあるよ
うに思われた ○小川さんに話すことがあったんです ○ハムレットの写真
を見たことがある ○六十才ぐらいまでやったことがあります △二十分

以上も待ったことがしばしばある △「波」の演出をしたことがあるが △花をさしていただいたことがある △……本が昭和の初めに出たことがある △メーカーを見学したことがある ○と嘆息していたことがある ○大きな樽柿を十六食ったことがある ○旗振りの役をつとめたことがある ○度々豊津まで出掛けたことがある ○兎狩りをしたことがある ○三四郎は二三度訪問したことがある ○君、女に惚れたことがあるか ○足りない所を一時二宮さんから用達て貰ったことがある ○度々人に貸したことがある ○レオナルド, ダ, ヴィンチと云う人は桃の幹に砒石を注射してね、その実へも毒が回るものだろうか、どうだろうかと云う試験をしたことがある ○露悪家と云うことばを聞いたことがありますか ○君、不二〈ふじ〉山を翻訳して見た事がありますか 【類・例・関係】○現に結果の悪い実例があるんだから △税金の追徴をした事例がある ○従来からこの雑誌に関係があつて ○何か今までに関係があるのか ○この人とは水蜜桃以来妙な関係がある △中ソ論争に関係があるらしい △……と服装には何か特別な関係があるらしい ○日英同盟と大学の陸上運動会とはどう云う関係があるか、頓〈とん〉と見当が付かなかった △一連のいやがらせ事件と関係があるかどうか △只見川水系の大電力源があり △援助約束という大きな成果があった △やがて共同の目的が「人づくり」であることをさとる △格別の理由があったわけではなかった △新聞記事にも理由がある △南部とはこの点に大きな違いがある △各州によって方法に相違があるが ○広田先生の坊主頭と比べると大分相違がある ○我々は西洋の文芸を研究する者である。然し研究は何処までも研究である。その文芸のもとに屈従するのとは根本的に相違がある ○三四郎から見ると二つの間には大変な違いがある △二国間に根本的な意見の不一致がある △E商店と個人的なつながりがあったわけではない △一部学生の授業放棄があった 【様相】○亡者の相がある △どうも伝染性があるらしい △社会的な受容性がある ○そんなに結婚を妨げるような事情が世の中に沢山あるでしょうか ○それがすこぶる楽天の趣がある ○青い松と薄い紅が具合よく枝を交〈かわ〉し合って、箱庭の趣がある △

利回りを重視する幣がある △欠陥や幣害がある △予算編成上難点がある
○二重まぶたにはっきりと張りがあった ○口にしまりがある ○肉のゆる
みがある 【力】○光線に圧力があるものか ○光線にどんな圧力があつて
【動き・変化】○すこぶるみごたえがある △彫刻界の動きがあつう △
ちょっと停滞があり △生産の停滞があつた ○まだこの続きが一冊あるは
ずだ ○口調には抑揚がある ○顔だけでも非常に面白い変化がある 【位
置・時間・場合】△真実性をたしかめられるばあいがある △札幌帰郷の
チャンスがあるとまずとびつく △春山シーズンにも吹雪の日が一、二回あ
り ○夕暮にはまだ間があった ○そんな場合があるでしょうか ○三四郎
はまだあとがあるかと思って 【空間・場所】○どうしてもためにするところ
があつて ○行きたいところがありさえすれば行きますわ ○可愛らしいと
ころがある ○書きおとしたところがある ○落ちつかないところがある
○イプセンの人物に似たところがある ○イプセンの女のようなところがあ
る ○どこかおもしろいところがある ○ことに自分の性情とは全く容れな
いような所がある ○先生はえらいところがあるよ ○しかしあかりきれな
いところが大変ある △態度が緩和したとみられるふしがある △学問的に
も興味をそそられる点がある △全国主要都市に支店があります ○丁度休
むにいい場所があるから △室内が荒らされたあとがある ○亞典<アテン>
の劇場は一万七千人を容れる席があつた ○背中にお灸の跡がいっぱいあ
つた △それにも限界があり △手に負えない面がある 【形・型・構え】○
こういう構えがあれば △会議上程までにはなお曲折があつう ○背広には
ところどころにしみがある ○また泥棒早見という欄があつて △まだまだ
距離があるようだ ○その方が命に奥行があるような気がする(ひゆ的用法)
○先生くらい余裕があるなら ○周囲に調和して行けるから、落ち付いてい
られるので、何処かに不足があるから、底の方が乱暴だと云う意味じゃない
のか 【数・量】△集金した現金七十万円があつた ○この三十円が二人の
間にある △配当には差があるとはいへ △まだ改良の余地がある △お値
打品は特に数に限りがある 【人間活動の主体】△朝廷に参加していいもの

があり ○色々結婚のしにくい事情を持っている者がある ○馬鹿囃くばかりやしを御習いにならないかとすすめるたものがあつてね ○それでも休みながら「森の女」の評をしていたものがある ○うまいと大きな声を出したものがある ○「偉大なる暗闇のために」といったものがある ○なかにひとり広田さんといったものがある ○爺さんに続いて降りたものが四人ほどあった ○細君が厭になって離縁を請求したものがある ○後ろからちょいと肩をたたいたものがある ○それを舞台の真中に留めたものがある ○自分の名を呼んだものがある ○またひとり土手から飛びおりたものがある ○与次郎は社員に知ったものがあるから ○厚い本を二三冊抱えて出口へ出て左へ折れて行くものがある ○あすこ、ここに席を立つものがある ○しかし外套を着ているものが大分ある ○金持の娘やなにかにそんなのがあるじゃないか ○お役目に親切をしてくれるのがある ○好きな人があるまで独身でおくがいい、 ○早く適當の日本人を招聘して大学相当の講義を開かなくては、学問の最高学府たる大学も昔の寺小屋同然の有様になって、煉瓦石のミイラと撰ぶ所がない様になる。尤も人がなければ仕方がないが、ここに広田先生がある ○そしてすべての上の冠として美しい女性がある ○あの君の知ってる里見という女があるでしょう ○もしかる人があつて、その女は何の為に君を愚弄するのかと聞いたら、三四郎は恐らく答え得なかつたろう ○念頭に美弥子という女があつて、この理論をすぐ適用出来るからである ○ところがその桃を食って死んだ人がある △……はおそろしい所と思っている人がある △酔って大金を忘れる人がある ○向うの隅にたつた一人離れて茶を飲んでいた男がある ○こどももがあったこともない ○美弥子さんの兄さんがあるんですか ○そのかわり連くつれがある ○はいってみると客が二組あって ○絵の方でも自然派がありますか 【人間活動の場】○はいるとうちがまた見当違いのところにあつた ○左右に本屋と雑誌屋が沢山ある ○かどにそばやがある ○向側に日本小間物屋がある ○こちら側に西洋小間物屋がある △……に支店があり △二十分のところに戸倉という町がある △冷房つきのホテルがあり △……を経験したアジア・

アフリカの国があるか ○建築にもヌーボー式があるものとはじめて知った

【精神】△苦しみをいとわない精神が人一倍あれば △本気で平和を求める
気があるのか ○むしろ一種異様の感がある ○若い人は活気があつていい
○与次郎の論文には活気がある ○ただ技巧のもたらす感じだけがある ○
その意味のうちには例の疲れがある ○その調子には弁解の心持がある ○
浮いた調子は猪牙船に乗った心持がある ○世の中にいて、世の中を傍観し
ている人は此処に面白味があるかも知れない △いわば他流試合の面白味が
あるわけだ ○家庭の楽しみがあるじゃなし ○ことによるとひやかされる
おそれがある △政治的な活動を行うおそれがある △大きなあやまちをお
かすことになるおそれがある ○腕を折るおそれがあるから ○美しい享楽
の底に一種の苦悶がある ○どこかに不満足があるようにおぼえた △洗っ
ても寸足らずになる心配はありません △ひびわれの心配はありません △
無意識的な同情があるようだ △どうも認識されていないうらみがある ○
馬鹿とすれば鯨〈てら〉わないところに愛嬌がある ○何だか僕に責任があ
るように書いてあるから困る ○僕にも多少責任があるからあやまつてくる
○イソップにもないようなこっけい趣味もある ○煙が鼻の下に低徊して、
髭に未練があるように見える時は、冥想に入る ○歌や踊りのお稽古があるので
△訓練機関に学んだ経験があるが ○人の読まないものを読む癖があ
る △……というような考えが背後にある ○三四郎にはすこぶる不思議の
思いがある ○けれども子規の話だけには興味があるような気がした ○そ
れからカソリックの連想がある ○その牛肉屋の牛が馬肉かも知れないとい
う嫌疑がある △任務分担に問題がある △心臓外科にとって大変な意味が
ある ○そういう意味があるのか、ちっとも知らなかつた ○広田の家に來
るにはいろいろな意味がある △活動に専念するなどの話題があつたばかり
ではなく ○もう少しはしようがあつたろう ○三四郎は何とか弁護の道が
ありそうだと思った ○馬鹿囃には八通り囃し方があるんだそうだ △切り
下げるに第一のねらいがあるものと金融筋は判断 【言語】○なんだか
文句があるようだけれども ○美弥子さんのお言伝があつてよ ○母の手紙

があるので ○小川さん面白い話がある ○よし子にも結婚の話がある ○広田先生のところでそんな話がありましたから ○……氏の記念講演がある△大学で保育の講義があっても ○純文科共通の講義がある ○用談があって人と会員の約束などをする時には、先方がどう出るだろうという事ばかり想像する ○二人の間に長い絵画談があった ○答え方がいろいろあるので ○「二階のお掃除」と上から返事があった △江田君の方から批判があるというが △中国より批判があるようだが △反対論があるかも知れない ○母の手紙に長い説明がある △漂着したと報告があり △……氏らの研究報告がある △やめてほしい」と申し出があった ○出入するといううわさがあるがほんとうか ○手の届きかねるまで高く積み重ねた書物がある ○書物がたくさんある ○割合に西洋の書物が沢山ある ○見ると部屋のすみに新聞がある ○そのほかには絵が沢山ある ○そういう名の全集が小説のうちにあった △腹も身のうちという諺があります ○かきかけた水彩がある ○いろいろ面白い句が沢山ある ○その脚本のなかに有名な句がある ○電燈がある。銀匙がある。歎声がある。笑話がある。 ○その中には東京はあまり面白い所ではないと云う一句があった 【文化・生活・衣食住】○競走があって、長飛があって ○それから又競走があって ○入学式があった△……の騒ぎがあり △出願者から激しい働きかけがあり △株主のために公開する責務があろう ○例の用事を片付ける義務がある △この作家の不思議な魅力がある 【義務・用事】○京都で一寸用があって降りたついでに ○はじめの用があるんだのに ○何か用があるようだったか ○いえ少し用があるんです ○実は今日君に用があるといったのはね ○ご用があるんですって ○けれども美弥子は少し用があるから帰るという ○今日何か原口さんにご用がおありだったの 【交わり・参加】△八木沢主将の送手宣誓があったのち △大型タンカー三隻の引き合いがあるなど ○苦痛に近き訴えがある ○三四郎に頼みがあるといいだした ○女同志の間には、もう一遍競技を見に行こうかと云う相談があったが ○母からこういう依頼があったと ○よし子に縁談の口がある ○美弥子さんにも縁談の口があるそうじゃ

ありませんか ○今夜は同級生の懇親会がある ○曾我の討入がある 【支配・政治】○この冬休みには帰ってこいと、まるで熊本にいた当時と同様な命令がある ○けれども何か妙な助言がある ○与次郎の注意があったから ○美弥子さんのご注意があったから ○身体を大事にしなくてはいけないと云う注意があって 【経済】△自動車などに大きな需要があると期待されています ○あの女は自分の金があるのかい、△取りあげる価値があると思う△政府で検討する価値がある ○与次郎の云う所によると競技より女の方が見に行く価値があるのだそうだ ○それでこそ講義の価値があるような心持がする △この中には製材があった △自信の裏打ちがある ○こけのはえた煉瓦作りがある 【生産物・用具】△長く愛重にたえるものがどれだけあるか ○おっかさんから頼まれたものもあるから ○御寺の前を通り越して、五六町来ると、大きな黒い門がある ○手ごろな石を置いたものがある ○机の上には筆と紙がある ○君、水晶の糸があるのか、○野々宮さん水晶の糸がありますか ○芝居小屋は下足があるから ○右側に大きな西洋館がある ○ほかにもまだ目に入らない建物がたくさんある ○二人は追分の通りを細い露路に折れた。折れると中に家が沢山ある ○まるで約束のできた家がとうからあるごとき口吻である ○ほかに二階がある ○三つの中二階がある ○左の方に戸があって ○こっちへという所に台がある ○正面に壁を切り抜いた小さい焼炉がある ○それと鍵の手に座敷がある ○広い閲覧室がある ○台所の脇に立派な生垣があつて ○生垣に奇麗な門がある ○向うに藁屋根がある △そばに三万円入りのバッグがあつた △内ポケットに果物ナイフ一本があり △シッカロールがある、ベビロンがある ベビーソープもある ○机の上にはがきがある ○泡立つシャンパンの杯がある ○銀匙がある ○砂を練り固めたような大きな甕〈かめ〉がある ○前にろうそく立てが二本ある ○縁側に絵の具箱がある △わが社のばあいも相当の株数が保有組合、共同証券のてもとにあるが ○左様イプセンの劇は野々宮君と同じ位な装置があるが ○ろうそく立てのうしろに明らかな鏡がある ○電燈がある ○半町ばかり来た所に、突き当たりと思われる様な小路

がある ○果して細い三尺程の道があった ○道があるなら、あの唐辛子の傍を通って行きたいと云う ○坂の下に石橋がある ○また橋がある' 【自然物および自然現象】○目のうちにはあきらかに憎惡の色がある △……のことばには予言者の響があった ○その調子には初対面の女には見出す事の出来ない、安らかな音色があった ○偽わりの記事——広田先生——美弥子——美弥子を迎えて連れて行った立派な男——色々の刺激がある ○美しいおだやかな味わいがある ○帶の感じには暖かみがある ○大きな石がある ○この上には石があって、かけがあるばかりである ○すべての上につもったちりがある ○柱にさびがある △15メートルの積雪があり △環元漂白と酸化漂白とがって △「現代の谷間」があった ○足の前にぬかるみがあった ○中に小さな島がある ○真中に池がある △それにスープがすばらしく栄養があるので ○向うを見るとまた松がある ○その先にも松がある ○門内に大きな松がある ○曙町へまがると大きな松がある ○大きな百日紅がある ○松が沢山ある ○菊が一株ある ○手洗水のそばに南天がある ○大きな桜がある ○しかしこれは根が隣にあるので ○まばらな孟宗藪がある ○高架線の線路に男の死体があるのを ○そのなかに遠い心持のする目がある △ご先祖様にはひげある △微熱があるとき ○大分熱がある ○熱がおありなの ○ゆうべそこに躰死があったそうです 【相の類】△別にほりさげて検討する必要があるため △慎重に取り扱う必要がある △そのように訓練しておく必要がある △消費者を教育する必要がある △収益率」をきめてにする必要があるのでないか ○この事實をたしかめておく必要があった ○というところを見て置く必要がある △表層なだれの危険がある △どのような困難があろうとも

「ある」の主格になる名詞の種類はきわめて種類が豊かである。非常にさまざまな名詞が、主語となりうる。これについて次のようなことが、いえよう。

1. 種類が豊富であるが、分類語彙表番号でいうと自然現象や、生産物、用具などでは最も自由であり、抽象的関係と精神活動がこれにつぐ。人間活動の場のばあいは自由であるが、人間活動の主体については特殊な

ケースにおいて主語となりうるのみである。

2. 人間活動の主体のばあいには「……するひとがある」のような用法が多く、そのことから inanimate に準じた使用法であるとも考えられる。
3. 名詞の性質によっては、その前にかなり固定した文型が現われるものがある。たとえが「関係」は「……と……とは」「……は……と」のような文型が多く出る。「相違」では、「……と……とは」「……に」のようなタイプが出やすい。後者の「に」の前にはたとえば「点」「間」「方法」などの用語がくることが多かろう。
4. はじめにものべたが、「ことがある」「ものがある」「ところがある」のようなやや形式的な用法をもつ expression がかなりある。

「いる」の例

○隣の連中は余程世間が広い男達と見て、左右を顧みて、彼処には誰がいる。此処には誰がいると頻に知名の人の名を口にする ○いることはぼくがいるのです ○あの人形を見ている連中のうちには随分下等なのがいた様だから ○なにしろ佐々木のようなのがいるから ○恐るべきクールベエという奴がいる ○この夏は野々宮さんだけで専領していた部屋に髭の生えた人が二三人いる ○しかも人が沢山いる ○あんまり人が大勢いたせいでしょう ○こんなに大勢人がいるんですもの ○ひとがいては、かねを返すのが、全く駄目のような気がする ○たとえばここに一人の男がいる ○あんな女が世の中にいるものだろうか ○その外には汽車の中で乗合した女がいる ○女がいなければ書くことがたくさんある △……話したところびったりの女性がいるというので面接 △故郷に妻がいる ○そのうちにいま話した小さな娘がいた ○女の家には野々宮さんの妹がいるだろう ○野々宮さんの妹がいやしないか ○君はたしかおっかさんがいたね ○もっとも今のうちには母がいるからかまいませんが ○そういう母をもった子がいるとする △目を離すと家に帰ってしまう子がいる △大いに批判している友人達がいた△喫茶店には数人の客がいたが △病院には十五人の入院患者がいたが ○文科で有力な教授がいる ○高等学校の生徒が三人いる ○七八十人ほどの

聴講者がいた △約三千人の食肉検査員がいるが ○こんどは主人公がいるので △会長がいる ○この三人のほかに、まだ連れがいるかいないかをたしかめ ○もっともほかに同志は三四人はいるから ○三四郎がそばにいるのがまるで苦にならない ○翌日学校へ出てみると与次郎がいない ○早速本を置いて入口の新聞を閲覧する所まで出て行ったが、野々宮君が居ない ○この静けさのうちに美弥子がいる ○よし子がいるからああ冷淡なんだろう ○そばによし子がいる ○よし子がそばにいてくれる方が便利だ ○与次郎なるものが二人いるとしか思われない ○大観音前に乞食が二人いる ○高い雲が空の奥にいて容易に動かない

動詞「いる」はほとんどすべて *animate* の例である。しかも人間が主である。ただ最後の例は「雲」が主体であるが、これはあるいは「じっとしている」の意味かもしれない。現在では「車」など人の乗るものは、「いる」を使うことがあるといえよう。「車」などはこの意味では、動物の次に位し、自然物との中間にあるといえるかもしれない。

動詞「ある」「いる」と他の格として「に」をとる。これは大体+loc. であるといえよう。特に「いる」のばあいは名詞ももともと+loc. の性質をもったものが「に」の前にくる。三四郎の例で終止形「いる」の前に現われたものを拾うと、「いなか」「うち（宅）」「奥」「どこか」「二階」「学校」「故郷」「ここ」「先（のところ）」「下」「東京」「遠く」「ところ」「隣」「中」「はずれ」「前」などである。「ある」のばあいにも+loc. と考えられるものがほとんどである。たとえば三四郎の終止形の例では「間」「上」「奥」「西側」「ここ」「はなの先」「下」「正面」「書斎」「隅」「手前」「遠く」「所」「隣」「中」「故郷」「前」「真中」「向う」「横」「廊下」など。しかしこの語のばあいには別ないくつかの用法がある。

○腰から下は正しい姿勢にある ○実際の目的は衣食にあるんだから、生徒から見たら定めて不愉快だろう ○昔の偽善家に対して、今は露悪家ばかりの状態にある ○今日の文権は全く吾々青年の手にあるんだから
のような用法では全く別な種類の名詞が前にある。このような別な用法でなくとも、

○全く西洋の絵にあるデヴィルを模したもので ○三四郎は癡とその横顔を眺めていたが、突然手杯 <コップ> にある葡萄酒を飲み干して、表へ飛び出した ○小説などにある甘いことばは使いたくない
などは場所に準じた使用法であるともいえようが、名詞はもちろん+loc. ではない。

時間を意味する名詞に「に」がつくものはいろいろありえよう。

○もうちかいうちにあるはずだから
なお、ついでながら、「ある」については、補助的な「である」という用法がかなり多く出る。これについては、ここでは取り扱わない。
動詞「ある」「いる」に準ずるものとして、いくつかの動詞がある。次に出現した例をならべておく。

○細君が、わたくしがうちにおっても、貴方が出ておしまいになれば △上
値にはもどり売りがかなり大量にひかえているから ○広田先生が小さな小
宅を控えて ○不思議の因縁が二人の間に存在して

(1V-11) 「出現」の動詞 2. 121, 「現われる」現わす」「出現する」「かくれる」「かくす」「秘める」「ひそむ」「きざす」など。「出る」「出す」もこのグループの要素であるが、2. 1530 の「出入り」の方にまとめた。「現われる」「現わす」は「に」「から」の格をとり、「かくれる」「かくす」「秘める」「ひそむ」は「に」の格をとる。「現わす」「かくす」「秘める」は「を」の格をとる。

○やがて襖 <ふすま> を開いて、茶器を持って、よし子があらわれた ○と
ころへ知らん人が突然現われた ○そうして思いもよらぬ池の女が庭の中に
現われた ○そこへ与次郎がふらりと現われた △十人の「桜んぼ娘」が現
われ ○なにもう 5, 6 年するとあれより、ずっと上等なのが現れてくるよ。
日本じゃ今女の方が余っているんだから ○寝たまま、開け放しの入口に眼
を着けていると、やがて高い姿が敷居の上へあらわれた ○黒い影が闇のな
かからふきさらしの廊下の上へぼつりと現われると ○同時にきれいな歯が
現われた △突然右側にほうけい丸が現われたのであわててかじを ○光線

の圧力を試験する人の性癖が、こういうばあいにも、同じ態度で現われてくるのだ △人によって答弁の優劣がはっきり現われるようになった △アフリカ大陸に五つの軍事政権が出現したことは △このデモの結果左翼政権が出現することをおそれて △人口 40 万の田園都市が 47 年までに出現する予定 △新しく「大人の遊び場」が出現した ○美弥子が人のかげにかくれてみえなくなった ○野々宮さんが庭から出ていった。その影が折戸の外へ隠れると ○三四郎は敷居のうちへ這入った。先生は机に向っている。机の上には何があるか分らない。高い背が研究を隠している △国際政治上の大きなねらいが秘められている △鋭い機知とこうしようがひそんでいたが △人間の本質があばれ出されるとき ○眸と瞼の距離が次第に近づく様に見えた。近づくに従って三四郎の心には女の為に出なければ済まない気が萌くきざ〉して来た △セメント株に物色人気がきざしている

「現われる」の主語は人が多いが、そうでないばあいも少なくない。一般にこのグループの自動詞の主語は制限が少ないが、特に visible なものではそうである。これは動詞の意味に關係している。「現われる」は visible でなくても主語になるものがある。「きざす」は「兆候」「気運」など主語がかぎられる。

「現わす」「かくす」は

○女は堪くこらえ切れずに又白い歯を露わした ○と云って例の白い歯を露わした ○女は全く歯を隠した ○美弥子に関する凡ての事実を隠さずに話してくれと請求した ○円遊の演ずる人物から円遊を隠せば人物がまるで消滅してしまう。小さんの演ずる人物からいくら小さんを隠したって、人物は活潑激動に躍動するばかりだ ○今日は白いものを薄く塗っている。けれども本来の地くじを隠す程に無趣味ではなかった ○当時の気分をすなおにあらわしたものであるが

これらの行為の主体はやはり人間であろう。「高い背が研究を隠している」は文学的な表現であろう。ここではバラエティが少ないが、「を」の格の前にくる名詞は種類が豊富であろう。ことに 1.4, 1.5 の名詞は自由であり 1.2 も同様であろうが、1.1 と 1.3 には制限のあるばあいがあろう。

これらの動詞はまた「に」「へ」をとる。

○もっとも著しいのは浮世絵にあらわれた美人、悉く細い　○自由とは単にこれ等の表面にあらわれ易い事実のために専有されべき言葉ではない　○今三四郎の前にあらわれたハムレットは　○この論文は零余子なる匿名の下くもと〉にあらわれたが、実は　○明治の思想は西洋の歴史にあらわれた三百年の活動を四十年で繰返している　○先生の影は校門のうちにかくれた　○美弥子が人のかけにかくれてみえなくなる　○提灯の影は踏切りから土手下へ隠れて　○女の影は右へ切れて白い壁の中へ隠れた　○その影が打戸の外へ隠れると　○その顔と「ああああ……」と云った力のない声と、その二つの奥に潜んでおるべき筈の無残な運命とを、継合わして考えて見ると、これらの「に」格（「へ」を含む）の名詞の多くは+locativeであるが、「西洋の歴史」のようにそうでないものもある。

○その眼を見た時に、三四郎は今朝籃を提げて、折戸からあらわれた瞬間の女を思い出した

このグループには「から」をとるものがある。「出る」「出す」は1V-38にまとめた。

(1V-12) 「成立・発生」の動詞、2. 122、「できる」「できあがる」「なる」「なりたつ」「生じる」「おこる」「おこす」「おきる」「ひきおこす」「発生する」など。他動詞の主語は人間。自動詞の主語はさまざまであるが一つには動詞が多義的なものが多いことにもよる。「おこす」の「を」格の前の名詞は「おこる」の「が」の前の名詞になる。

○「おい、小川、大変なことができてしまった　○ところが困ったことができた　○なにか特別に忙しいことができたのですか　○本人が変るばかりじゃない、画工〈えかき〉の方の気分も毎日変るんだから、本当を云うと、肖像画が何枚でも出来上がりなくちゃならない訳だが、そうは行かない。又たった一枚で可なりまとまったものが出来るから不思議だ　○芝居にしたらそんなものができるでしょう　△そのためにまずそれができるような環境の

整備を ○「菊人形は可いよ」と今度は広田先生が云い出した。「あれ程に人工的なものは人工的なものは恐らく外国にもないだろう。人工的によくこんなものを揃えたという所を見て置く必要がある。あれが普通の人間に出来ていたら、恐らく団子坂に行くものは一人もあるまい。普通の人間なら、どこの家でも四五人は必ずいる。団子坂へ出掛けるには当らない ○はっと驚いた三四郎の足は早速 〈さそく〉の歩調に狂 〈くるい〉が出来た ○歩くと細い足のあとができる ○その世界のどこかに欠陥ができるような気がする ○女が偉くなると、こう云う独身ものが沢山出来てくる △結婚二年めの娘にもかわいいこどもができる △どんな二枚目ができるかもみどころだろう ○美弥子のところへ行く用事が出来たのはうれしいような △いったいどうしてそんなでかいしごとができるのだろうか ○かいている絵に一定の気分が出てくる ○例になくおもしろい勉強ができたので ○体がふるえてうまく答案ができないんで △きわめて好意的に話合いができたと思う ○ともかくも見ることに相談が出来て、三四郎が案内をした ○純粋で単簡な芝居が出来そうなものだ ○今の東京にいるものに悠揚な画が出来るものか ○気障か気障でないかほとんど判断ができない ○三四郎にはちっとも判断ができないのである ○食卓はむろん前から用意が出来ていた ○時々とんだまちがいが出来る ○そこで選択の自由の利く細い眼のうちで、理想が出来てしまったのが、歌麿になったり、祐信 〈すけのぶ〉になったりして珍重がられている △日ソ航空協定ができたので ○ハムレットのやうなものに結婚ができるか △既に最低賃金制というのができているのだから △こうした制度ができて ○美弥子と三四郎が戸口で本を揃えると、それを与次郎が受け取って室の中へ並べるという役割ができた △二百万円の借金ができた ○左右へ引っ張ると細い糸ができるのです △保存食の塩漬けができる ○くさみが消えスタミナ料理ができます ○こんなに古い燈台がまだ残っている傍 〈そば〉に、偕行社と云う新式の煉瓦作りが出来た △センターの熱湯で暖房ができる △株の値に黒い影ができている ○三四郎には三つの世界ができた ○成程自分のうちの庭が描き掛けである。空と、前の家の柿の

木と、這入り口の萩だけが出来ている ○男の顔が甚だどうもうに出来ている ○小川さん、僕のかいた目が實物の表情どおり出来ているかね △河口に洲が出るようなかっこう ○もし彗星の尾が非常にこまかいパーティクルからできているとすれば △……と違う海底地質——われめ——ができる広がった ○青白いうちにあたたかみができた ○本当をいうと肖像が何枚でもできあがらないのが ○靴の底やわらじの裏がきれいにできあがっている ○美弥子の影が次第に出来上りつつある 肥った画筆だけが動く ○本当をいうと肖像が何枚でも上らなくっちゃならないわけだが ○会の中心点がはじめてできあがった ○「然し先生は哲学者だね」「学校で哲学でも教えているのか」「いや学校じゃ英語だけしか受持っていないがね、あの人が、自〈おのず〉から哲学に出来上っているから面白い ○三四郎は出来るだけの言葉を層々と排列して感謝の意を熱烈に致した。普通のものから見れば殆ど借金の礼状とは思われない位に湯気の立ったものである。然し感謝以外には、何も書いていない。それだから、自然の勢い、感謝が感謝以上になったものもある (A) ○極めて神経の鋭敏になった文明人種が、尤も優美に露悪家になろうとすると、これが一番好い方法になる △現頭取が会長になり △チャイコフスキーの協奏曲が課題曲になっている △同所が北の丸公園になるため △岡先生が東大の法学部長になり △わが子の担任にどの先生がなるかということ △謹厳な英國の議員先生が「浦島」になったのも △団蔵の孫、銀之介が鬼若から弁慶になる ○そこで選択の自由の利く細い眼のうちで、理想が出来てしまったのが、歌麿になったり、祐信〈すけのぶ〉になったりして珍重がられている △五十才くらいの男が下半身黒こげになって死んで (B) △ここらで人気化して走った時がこの数年間の大天井となり、あとは △ちょっとした失敗が大火になりかねない、△権力をねらう肉親あらそいなどがテーマになっている △世界のこどもが輪になって ○せっかく赤くできた柿が、かけぼしの渋柿のような色になった ○木がのびのびして魂が大空ほどの大きさになる ○花と葉がすきまなく衣裳のかっことなる ○煙が沈黙の間に棒になって出る ○ことに明日逢う時に、どん

な態度で、どんな事を云うだろうとその光景が十通りにも二十通りにもなって、色々に出てくる ○畠の先が森で森の上が空になる ○よし子が画のつづきを描き出してから、問答が大変楽になった ○……とまるで自分から事が起ったとは認めていない申分である △……した時に、案外こういうことがおこる ○こんどは三四郎も笑う気が起らなかった ○研究する気など起るものではない ○自分も早く一人前の仕事をして、学海に貢献しなくては済まない様な気が起る ○しかも落ちついた感じが起る ○一銭も投げてやる了簡が起らなかったのみならず △……という話がどちらからともなくおこった △アルジェリアで軍事クーデターがおこって以来 △青梅駅前に相次いで火事が起こり、8棟を全半焼 △地下鉄の工事中、突然爆発がおこり ○本人の意見をたしかめる必要がおこったのだという △人類救済、和合と平和の決意が人間の心の底からわきおこった △……さんが昨年一月二九日大阪府、大阪市の二者を相手どって、訴えをおこした △西アフリカのオートボルタで軍がクーデターを起こし ○若い女が癆を起している ○第一自分が事を起こしておいて △二度とこういう事件が起きないためにも極刑を ○ああ云う姿勢や、こう云う乱雑な鼓だとか、虎の皮だとかいう周囲のものが、自然に一種一定の表情を引き起す様になって来て △新予算の執行にはほとんど支障が生じないみこみである △一年中の火災の約六割までが春に生じている △どのような事態が発生し

「できる」については、『分類語彙表』は「成立・発生」のところに分類している。そうして大部分はそのように解釈することも可能であるようにも思われる。しかし多義・多用法的動詞とみるべきであろう。前にくる名詞は、人間の行為を中心として、人間、生産物があり、自然や抽象的関係のものもある。「ことができる」の形で可能の expression が多く用いられる。「三四郎」の例では、○三四郎はその呼吸〈いき〉を感じる事が出来た ○二十三の青年が到底人生に疲れている事が出来ない時節が来た ○ああ云う便利な方法で人の傍へ寄る事が出来ようとは毫も思い付かなかった ○己〈おれ〉が金を返さなければこそ、君が美弥子さんから金を借りる事が出来たんだろう ○三四郎は

美弥子を余地から見る事が出来ないような眼になっている ○よくあんなに都合よく眼を覚ます事が出来るものだと思った ○与次郎はこの烟の出方で先生の気分を窺うことが出来ると云っている ○これが明瞭になりさえすれば、自分の態度も判然極める事が出来る

「できる」は他の格として「から」をとることがある（「こまかいバーチカルから」の例）。「できあがる」の他の例。

○額が御光さんの様にだだっ広くない。何となく好い心持に出来上っている
○左り手のずっと奥にある工科大学は封建時代の西洋の御城から割出した様に見えた。真四角に出来上っている ○（美弥子の絵葉書は）諸事明瞭に出来上っている ○原口さんの絵は出来上がった

一般には人間の行為の結果や生産物が主語になるのであろう。

「なる」の用法は、前論文「助詞『に』を含む動詞句の構造」で述べているが、そのあと奥津敬一郎氏の詳細な研究が発表された。奥津氏の研究では「AがBになる」という文には embedded sentence として「AはBである」があるという。このような見方は、筆者が行なってきた $A = B$, $A \neq B$ という分け方と符合するところがあるとみてよいだろうし、筆者がかつてこのことについて、東京言語学会で発表したとき、奥津氏より教示を受けてもいる。ここで $A = B$ が (A) とそれにつづくもののはあい、 $A \neq B$ は (B) とそれにつづくものにあてはまると考えられる。

「おこる」の主語は、「気」「了簡」「感じ」「話」「クーデター」「こと」など人間の精神活動を中心として、「火事」「爆発」のような自然現象の名詞のはあいもある。その他の例。

○惜しい気も起こらない ○話しひは野々宮と美弥子の間に起りつつある ○地上に起こる颶風以上の速力で ○死顔をみるとこんな気もおこる
「地上に」のような「に」格のほか、「から」もとる。

○三四郎はこの無神経を全く夜と昼の差別から起るものと断定した
「起こす」の他の例。主語はいずれも人間で、「を」の名詞は人間の精神活動関係。

○疑いを起こさないとも限らない ○はじめから余計なことをおこさない方が ○……をきくと一般的の感をおこさせる ○奥行の長い感じをおこせる ○かんしゃくをおこして ○三四郎は見渡すかぎり見渡して……雄大な感じを起こした ○不審を起こして店のなかにはいってみると ○君、 こういう空を見てどういう感じを起す

「を」の前の名詞は自動詞の「が」の前の名詞になる。

「生ずる」は自動詞と他動詞の用法がある。「から」の格もとる。

○一種重要な影響を生じうる ○予期から生ずる敬意の念 ○その翻訳から生ずる感化の範囲。

(1V-13) 「仕上げ」の動詞, 2. 123, 「仕上げる」「仕上がる」など。これらのグループの内容は比較的うすく, 再分類されるべきかと思う。「しあげる」の主語は人。「を」の前の名詞が「しあがる」の「が」の前にくる。

○三四郎は画の道に暗いから, あんな大きな額が, どの位な速度で仕上げられるか, 殆ど想像の外にあったが

次のものは主語は明言されていないが, やはり人である。

○里見さんだって同じ事だ。自然のままに放って置けば色々の刺激で色々の表情になるに極っているんだが……その習慣が次第に他の表情を圧迫する程強くなるから, まあ大抵なら, この眼付をこのままで仕上げて行けば好いんだね

「しあげる」の「を」の前にあるものは, 人間活動関係, 生産物などが多いだろう。「目付き」は「目付きの描写」など, 「目付き+ x」の表現である。

(1V-14) 「残存・消滅」の動詞 2. 124 のうち, 「残る」「残す」「取り残す」など。「残す」は大体人が主語であろう。「残る」と「残す」は対応が完全ではないようであるが, 対応がある部分については「残す」の「を」の前の名詞は「残る」の「が」の前の名詞になる。

△……の二人が残る △いやはにおいが消え, おいしさだけが残ります △

後遺症が残って △どの歌が時代の歌として残ってゆくか △共同証券が会社として残る △大統領を批判しているのが印象に残っている ○こんなに古い燈台がまだ残っている ○梢に虫の食ったような葉がわずかばかり残っている ○三四郎の記憶にはただ入鹿の大臣という名前が残っている △東京湾で菊丸だけがそっと取り残されていた

「のこる」の前の名詞、「のこす」の「を」の前の名詞は種類がいろいろである。自然現象、人間、人間行動関係、生産物などがありうる。このほか、「に」をとり、+loc. でなくとも臨時にその役をするもの「記憶」「歴史」「名」などがくることもある。

○(この爺さんは) ……三四郎の記憶に残っている ○古い蔵が半分取崩されて心細く前の方に残っている ○朽ちざる墓に眼り、伝わる事に生き、知らるる名に残り ○止める程の必要もなし、一所に行く程の事件でもないので、二人は自然後に遺〈のこ〉る訳になった

「残す」の例。

○「そう」と疑を残した様に云った ○徒に真を舌頭に転ずるものは、死したる墨を以て、死したる紙の上に、空しき筆記を残すにすぎず

(IV-15) 「残存・消滅」の動詞 2. 124 のうち、「なくす」「なくなる」「つくる」「消える」「失う」「解消する」「根絶する」「消滅する」など。「なくす」「失う」「根絶する」などの主語は主として人間である(これらは「を」格もとる)。その他の動詞の主語はさまざまである。

○友達が金をなくして弱っていたから ○その屋根が判然〈はっきり〉尽きる所から明らかな空になる △来日記念レコードも種が尽き ○移り易い美しさを、移さずに据えて置く手段が、もう尽きたと画家から注意された様に聞えたからである ○銀杏が向うの方で尽きるあたりから、だらだら坂に下って ○何処で地が尽きて、何処で雲が始まるか分らない程ものうい上を、心持黃な色がふうと一面にかかっている △係員が八方手を尽して ○すると奥の方でヴァイオリンの音がした。それが何処からか、風が持つて来て捨

てて行った様に、すぐ消えてしまった ○三四郎が半ば感覚を失った眼を鏡の中に移すと ○三四郎はこの活人画から受ける安慰の念を失った △季節物を中心に食べる習慣が失われている △……制度ができて過密都市の弊が解消したらどうだろう △昨年は研修を受けた各国が「アジア犯罪基地」から麻薬を根絶するため ○円遊の演ずる人物から円遊を隠せば、人物がまるで消滅してしまう

「なくす」の他の例。「を」をともなう。

○その金をなくしたんだからすまない ○自分の金をなくしたんだってね

○実は金をなくしてね

「なくなす」の例。「で」もともなう。

○どう云う種類の金をどこで失くなしたか

「つくる」について、「屋根が尽きて」「銀杏がつくるあたり」「地が尽きて」のような表現は、現在ではあまり使わないだろう。主語はなにか集合し連続した感じがある。「消える」の例。「が」の前は+visibleであろう。

○10が消え、9が消え……2が消えた ○三四郎の足が門前まで来た時は先生の影が、既に消えて ○与次郎はくるりと引っ繰り返って、幕の裾をもぐって何処かえきえうせた ○透き徹る藍の地が消えるように次第にうすくなる「失う」は、人間、人間活動、生産物その他広く補語をとる（「を」）。

(1V-16)「保有・除去」の動詞、2. 125、「たもつ」「する」「とれる」「とる」「要る」「要する」など。他動詞の主語は人間。「を」格の名詞は対応する自動詞の主語に対応。

△こうみると、橋が人気を保ちつづけている △弁護人の戒能通孝氏が大学教授の職を捨てて ○進んでゆけば苦悶がとれるように思う ○まだふたがとらずにあった ○ふたがとつてある △どうもつかれがとれない ○高く飛ぼうと云うには飛べるだけの装置を考えた上でなければ出来ないに極っている。頭の方が先に要るに違いないじゃありませんか △冷却水が要りません △中央政府軍の駐留がもはや必要でないと考える

「が」のない例。

○どのくらい体面を保つに都合がよいか ○三四郎は美弥子を捨てて、二階をかけおりた ○三四郎は群集〈ぐんじゅ〉を押し分けながら、三人を棄てて、美弥子の後を追って行った ○学生は帽子をとって礼をしながら ○男は軽く帽子をとって ○ただ帽子をとって礼をした ○そのかわりひまは要る。金も要る

(1V-17)「整備」の動詞2. 130、「そなえる」「そなわる」「そろえる」「乱れる」「乱す」「くるう」など。他動詞の主語は主として人間で、「を」の前の名詞が対応する自動詞の前にくる。「に」の前は場所の名詞がくる。

○正面からのぞくと奥には、書物がいくらでも備え付けてあるようにみえる
○望遠鏡がいぜんとしてもとの通りの位置に備えつけてあった △インドネシアには感染する体質が十分すぎるそなわって △文学座のベテラン達が顔をそろえる豪華な配役 ○美弥子と三四郎が戸口で本をそろえると ○玄関には美弥子の下駄がそろえてあった ○玄関に靴がいっそくそろえてある
○きょうは少し装置が狂ったので晩の実験はやめにする ○ぼくのやることは自然の手順が狂わないようにあらかじめ……

他の例。

○「私?」と羽織の袴〈ゆき〉をそろえて、紐を結んだ ○肝心の主脳が動かないので、二人共書物を揃えるのを控えている ○不規則だけれども乱れない上から三分一の所を、広い帯で横に仕切った ○描かれつつある人の肖像はこの彩色〈いろどり〉の眼を乱す間にある

(1V-18)「でき・利き」の動詞2. 131のうち、「きく」。主語が限定されている。「気」「幅」「薬」など、「薬」のはあい、「に」の前に病気、病状など。

○少し気が利きすぎているくらいだ △よほど気が利いている ○銅像でもこしらえるほうが気が利いている ○それからフロックコートや何か着た偉そうな男が沢山集まって、自分が存外幅の利かない様に見えた事であった

○第一幅が利かない　△次のどの薬がきくでしょう。

(1V-19) 「はずれ・損じ」の動詞 2. 132, 「はずれる」「はずす」「あらす」「あれる」など。他動詞の主語は人間。

○その思いつきがはずれたらなお罪がなくっていい　△室内があらされたあとがある　△二階の事務室があらされ

(1V-20) 「取合せ・つりあい」の動詞, 2. 133, 「つりあう」「値する」その他。この主語は制限が少ない。主語に「つりあう」ものとして同類の名詞「に」「と」に続く。

○背は頗る高い。瘠せている所が暑さにつりあっている　○この利用主義が昔からうまく平衡がとれている　○与次郎の云うところによると競技より女の方が見に行く価値があるのだそうだ

他の例。

○寂寞 〈じやくまく〉 の罫粟 〈けし〉 花を散らすや頻 〈しきり〉 なり。人の記念に対しては、永劫に価すると否とを問う事なし

(1V-21) 「変化」の動詞 2. 1500, 「変える」「変わる」「変化する」など。他動詞の主語は人間。自動詞の主語は他動詞の「を」の前と対応する。この「を」の前の名詞の内容は、多くのばあい、時間的、歴史的に変わりうるものであるか、あるいは同時に交替しうる別物別な姿があるものである。(+ NEG のときは別)。

△いままでの免許形態が変わることはない　○時の流れが急に向きを変えて
△君、ことしは人が変わったように元気だね　○本人が変るばかりじゃない、
画工 〈えかき〉 の方の気分も毎日変るんだから　△木版彫刻をおっていた若林が大きく変ってきたこと　△ただ、今のところ米国が変わったとはみられない　△……にくらがえした多くの馬は名前が変わる　○描かれる人の目の表情がいつも変わらずにいるものでしょうか　○空の色が段々変わってくる

△淡水ゴルフ場は、遠景が海、川、山と変化する

上の例で「時の流れが急に向きを変えて」という言い方があるが、これは「向きを変えて」という言い方が自動詞化するとみれば「流れ」が主語になることが説明できる。ある意味でこの表現自体、やや文学的であると考えられるが、最近はこの種の表現もいくらかみられるようになっている。

「向きを変えて」全体を一transitiv とすると、書きかえによる句構造文法と Valenztheorie あるいはその理論をとり入れた Transformationsgrammatik (たとえば C. Rohrer のものなど)との間で、取り扱いに大きな差違が生じることになる。この例はこの意味で理論に大きな影響を与える解釈を生みうる例であると考えられる。

他の例。

○三四郎は急に気を変えて、別の世界のことを思い出した ○野々宮さんは、若いものを、極め付ける積りで云ったんではないと見えて、少し調子を変えた ○(美弥子は)…… 云ったあとで急に調子を更えて「こういう所にこうして坐っていたら大丈夫及第よ」と比較的活潑に付け加えた ○すべて宇宙の法則は変わらないが ○表情がいつも変わらずにいる ○あなたは少しも変わらない ○つまり二十年前に見た時と少しも変わらない十二三の女である ○学生としての生活は以前と變る訳はない ○四五日行かないうちにそう急に變る訳もなさそうですが ○この人の生活その他がふつうの人と變っている

「に」「と」をとることがある。かわっていることを他と、前と比較するために用いる。

(1V-22) 「こみ・しまり・ゆるみ」の動詞、「こむ」「こみあう」「しめる」「しまる」「ゆるむ」「ゆるめる」など。「こむ」「こみあう」などは、「人」「車」「道」「往来」「交通」「場所」などが主体であろう(後者は+loc.)。「しめる」以下は本来1.4, 1.5などが自動詞の主語なのであるが、それになぞらえて、他の類の名詞も主語になる。他動詞の主語は人間。

△空の交通がこみあった時は羽田への △気分がほぐれ、財布のひもがゆるんでくるようになる ○今年は例年より気候がずっとゆるんでいる ○丈夫そうな命の根が、しらぬまに、ゆるんで ○そのとき、なにかの拍子で気がゆるんで ○二遍くりかえすと歩調が自ずから緩慢になる △米国の対中共態度が緩和したとみられる △味がぐーんとひきたちます

他の例。

○往来は暗くなるまでこみあっていいる ○もとから込み合った客車でもなかったのが ○袂から白い前垂を出して帯の上から締めた ○肉は頬と云わず頬と云わざきちりと締っている

(IV-23) 「改新・交換」の動詞, 2. 1501, 「改める」「改まる」「変える」「改まる」「変わる」「とかえる」「いれかえる」「いれかわる」「なおす」「なおる」「回復する」など。他動詞の主語は人。「改める」「改まる」「いれかえる」「いれかわる」「なおす」「なおる」などには「が」「を」の前の名詞の対応があることが多い。この名詞の意味特徴は「交換・変換・改新しうるもの」であるが、この性質はかなり臨時的であろう。

○三四郎がバケツの水を取り換に台所に行ったあとで △最後に小林さんが兄弟にかわって……といった ○先生は茶の間に長くなつて寝ていた。婆さんにどうなすったのか聞くと、……昨日のは勉強じゃなくつて佐々木さんと久しく御話をして御出だつたのだという答である。勉強が佐々木に代つたから、昼寝をする説明にはならないが、与次郎が昨夕先生に例の話をしたことだけはこれで明瞭になった △畑や山林の丘陵地帯が住宅地に生まれかわる日も近い、△干拓の一萬四千ヘクタールが、いま黄色の稲穂の波打つモデル農村に生まれかわろうとしている △患者の心臓が完全に機能を回復する ○重化学工業部門が回復してこなければ △海も天候が回復すれば △テープレコーダーの増産で業績が回復しており ○三四郎はもう一遍、女の顔付と眼付と、服装とを、あの時あのままに、繰返して、それを病院の寝台の上に乗せて、その傍に野々宮を立たして、二三の会話をさせたが、兄では物足

らないので、何時の間にか、自分が代理になって、色々親切に介抱していた
△つっこんだ意見が交わされたが

他の例。

○髭のある人は入れ換って、窓から首を出して、水蜜桃を買っている ○い
くら云っても直さないからほっておく

(1V-24) 「開始・終了」の動詞、2. 1502、「はじまる」「はじめる」「おわる」「や
む」「やめる」「すむ」「すます」「とぎれる」など。他動詞の主語は人。対応す
る用法のある自他の動詞の「が」の前と「を」の前の名詞は対応する。この名
詞は多くは人間の行為かそれに関することばで、何かの意味で時間的に持続す
る内容のものであるのがほとんどである。代名詞で指示しているものも、それ
である。人間行為でなければ、自然現象などで時間変化のあるものである。

【人間行動関係】△通関手続が書類審査で済まされる点で △真剣な弓の修
業が始まる △私立高校の入試が始まる △百七一校の入学試験が十日朝か
ら始まった △六三一人の試験だけが九日午前九時から始まった △六日で
入学試験が終わったので ○笑い声がまだやまないうちに ○二人が話を始
めているうちに ○「それに表情と云ったって」と原口さんが（話ヲ）また
始めた ○与次郎と美弥子の問答が始まった ○演説が済んだとき ○それ
から約十日ばかり立ってから、漸くようやく講義が始まった ○控え室へ
はいるのがきらいで講義がすむといつでもこのまわりを ○講義がすんでか
ら、ゆうべの約束を ○講義が終わってから、三四郎は ○講義が終わるの
を待って ○講義が終るや否や ○そのうち談話が段々始まった ○やがて
二人の女の間に用談が始まった △印バ会談が終わる △「私の事情」が始
まる ○そのうち幕があいて、ハムレットが始まった △ついに「七人の孫」
が終わった今 △ソフィア・ローレンさえ、出番が終わっても △10時15
分に最終会が終わり ○別れようとすると、の方が互にお辞儀を始め ○
すると野々宮さんがいつ何時下宿生活をやめる時期が来ない △再び御夫婦
だけの生活が始まる老後期 △授与式が終って在園組のうたう ○今夕飯の

すんだところらしい ○飯が済むと下女は台所へ下る ○二百メートルの競走がすんだのである △実勢悪をいや気した投げがやまず続落 △実勢不振から売物がやまずじり安 ○その次には槌投げが始まった ○芝生の中では砲丸投げが始まった ○会がすんで外へ出ると ○会見が済むと ○戦争が済んでから一旦帰ってきた △早くベトナム戦争が終わって ○夫の仕送りがとだえて ○どうかこうか掃除が一通りすんだとき △社会変革が始まると思う ○「電報はよそう。馬鹿氣ている。いくら君だって借りに行けるだろ」「行ける」これで漸く二十円の壇が明いた。それが済むと与次郎はすぐ広田先生に関する事件の報告を始めた ○やがて土手の下ががやがやする。それが済むと又静かになる ○誰か便所に這入った様子である。やがて出て来た。手を洗う。それが済んだら、ぎい風呂場の戸を半分開けた 【自然現象関係】△東京も夕方には雨がやみそう △二三日朝から雨が上り ○座敷の微震がやむまでは ○先生の煙がちょっととぎれた ○どこで地が尽きてどこで雲が始まるかわからないほどに

次の例では、「カレンダーを刷る」に「おわる」がついたもの。

△三十億円相当のカレンダーがすり終わっている

次の「かたづく」もこのグループのうしろに添えてよかろう。

△……方式でこの問題が片付くなら。

その他の例。

○母からの手紙が来た。……まず今年は豊作で目出度いという所から始まって ○論文は現在の文学者の攻撃に始まって、広田先生の讃辞に終っている ○この会合はビールに始まってコーヒーに終わっている ○学校は始まった ○食事は始まった ○お手伝をして一所に（掃除ヲ）始めましょうか ○そろそろ運動を始めたな ○こそこそ運動を始めて ○斬合いをはじめた ○議論を始めた ○組打を始めた ○英語で講義を始めた ○演説めいたことを始めた ○話を始めた（10例） ○音はそれなりで已んだ ○歌は歌くやんだ ○三四郎は看病をやめて ○豊津の女学校をやめて家へ帰ったそうだ ○次の日は空想をやめて ○質問を已めてしまった ○談話をやめて ○相

手になるのをやめて ○笑うのをやめて ○それぎり話をやめてしまった
○今日限り昼寝をやめて ○野々宮さんは返事を已めて ○今日は白地のゆ
かたをやめて、背広を着ている ○もう唄は止める ○それなら私もやめれ
ばよかった ○くにから取り寄せれば事はすむ ○ただ金を受けとるだけで
すむかもしれない ○食事をすまして ○昼飯をすまして

他の格として例にあるように「に」「から」「で」がある。「に」の前が時間を意
味する名詞のときは「開始・終了」の時期を示し、そうでないときは「ビール
に始まって」のように行行為のあり方に関連した名詞がくる。「から」は「はじま
る」「はじめる」、「で」は「おわる」などと結びつく。

(IV-25)「連續」の動詞, 2. 1503, 「続く」「続ける」「続出する」「くりかえす」
など。他動詞の主語は人間。他動詞の「を」の前と自動詞の「が」の前は対応
する。この名詞はなにかの意味で継続・連續する、あるいはくりかえすことの
できる性質をもつものであると考えられる。

△政経分離の状況が続くことは好ましい △時代が30年にもわたるので
△無風状態が続けば △国民経済が安定的な成長を続ける ○「御苦労様」
と野々宮さんが言った。女は二人で顔を見合せて、他〈ひと〉に知れない様
な笑を洩らした。庭を出るとき、女が二人つづいた △全国各地から見学客
がひきもきらない △朝から晴着の列が続き △当分「独走」の期間が続く
△大方針は現執行部体制が続く限り変化はない △いわゆる村八分事件があ
とをたたず △八ヶ岳で遭難が続出したが △前場見送り気分が続き薄商い
△スト回避の努力が続けられた △……ほど気楽なものはないという文句が
何度も繰り返された ○「Pity's akin to love」と美弥子が繰り返した △中
央から右下隅にかけての応酬が続いた △二、三人ずつの制服警官がパト
ロールを続けた △調停、あっせん工作が続けられた △開学以来初の試験
ボイコットが続く早稲田の学生たち △米国が一年間近く続けた北爆 △
……を中心に小口の売り物が続いて小甘い動きにはじまり △アジアの一角
で激しい戦火が続いていることは △残雪のスバルラインも車の列が続いた

○こんどは高い音と低い音が二三度急に続いて △大西洋側は晴天が続く見
こみ

以上の例のなかで「国民経済が安定的な成長を続ける」という表現も、他動詞
の主語が inanimate である。しかしこの種の表現は現在ふつうである。
他の例。

○必修科目以外のものへも時々出席してみた。……然し大抵は二度か三度で
已くやめてしまった。一か月と続いたのは少しも無かった ○爺さんに続
いておりたものが四人ほど ○男も続いて席にかえった ○女も続いて通った
○三四郎も続いて庭を出ようとすると ○三四郎も続いて立った ○隣
の男は感心に根気よく筆記をつづけている ○先生は安心して柔術の学士と
談話をつづける ○明治の思想は西洋の歴史にあらわれた三百年の活動を四
十年で繰返している ○女は又「何」と繰返した ○三四郎は何とも答えな
かった。ただ口の内でストレイシープ、ストレイシープと繰り返した ○女
は三四郎を見たままでこの一言を繰り返した ○三四郎は勉強家というより
むしろ徳行家なので、割合書物を読まない。その代りある掬くきくべき
情景に逢うと、何遍もこれを頭の中で新くあらたにして喜んでいる。今日
も、何時もなら、神秘的講義の最中に、ぱっと電気が点く所を繰返して嬉
がる筈だが ○晩食後筆記を繰返して読んでみたが

(IV-26) 「揺れ・振れ」の動詞、2. 151。「ゆれる」「振れる」「振る」「ふるえ
る」「ふるう」「まわる」「まわす」など。他動詞の主語は人間。自動詞の主語と
他動詞の「を」の前は対応する。この名詞は本来「揺れ・ふれ・回転」の性質
のもの (1) と、そうなることが可能なもの (2) とある。いずれのばあいも、
かなり慣用的な表現が多い。

(1) ○その傍に奇麗な風車を結い付けた。車がしきりに回る △この二つの
歯車がフルに回転して ○短くなりかけた秋の日が大分まわったのと

(2) ○試験を受けるたびに、体がふるえて、うまく答案ができない ○その
実へも毒がまわるものだろうか ○その谷が途中からだらだらとむこうへま

わりこむところに △106号艇が懐中電燈をふりまわしたので ○「もう一冊あるはずだ」と与次郎が青い平たい本をふりまわす ○土質のせいか座敷が少しふるえるようである

(3) △マルクス主義を奉ずる弁士が熱弁をふるっていたが(原義より転移)他の例。

○裏から回って婆さんに聞くと ○門を開けさせても好いが、裏から廻った方が早い ○三人は裏からまわった ○ぬっと立って場内を一順丁寧に回った ○九時半に着くべき汽車が四十分後れたのだから、もう十時は過くまわ〉っている ○戸の後へ廻って、始めて正面に向いた時五十あまりの婦人が三四郎に挨拶した ○取付の戸をあたって見たら錠が下りている。裏へ廻っても駄目であった ○自分は寝台〈ベッド〉の向う側へ回った ○三四郎は突然バケツを鳴らして勝手口へ廻った ○三四郎は庭先へ廻って下駄を突っ掛けたまま孟宗藪の所から、一間余の土手を這〈は〉い下りて、提灯のあとを追掛けで行った ○「今に動きます」と云いながら向へ廻って何かしている様であった ○女は知らぬ風をして、向うへ廻って、鏡を背に、三四郎の正面に腰を卸した ○いつもの通り勝手口へまわると誰もいない ○野々宮君のうちへ回ろうと思ったら ○玄関からまわるべきのか ○裸体の女の腰から下が魚になって、魚の胴が、ぐるりと腰をまわって、向う側に尾だけ出ている ○それから谷中へ出て、根津を廻って、夕方に本郷の下宿へ帰った ○何でも山を買いたいという男が三人連れで入り込んで来たのを、角三が案内して、山を廻ってあるいている間に取られてしまったのだそうだ ○赤門の前を通る筈の電車は、大学の抗議で小石川を廻る事になったと国にいる時分新聞で見た事がある ○池の周囲〈まわり〉を回る事は見合せて他の例として示したもののはほとんどは「まわってゆく」の用法の例になってしまった。このばあい一種の移動の動詞で、「に」「へ」の前に+loc.の名詞があり、出発点に+loc.の名詞+助詞「から」、経由点に+loc.の名詞+助詞「を」が配される。主語は多く人で、車などもこれに準ずる。

(1V-27) 「動き」の動詞, 2. 150, 「動く」「動かす」など。「動かす」主体は主として人であり、「動く」の「が」の前の名詞と「動かす」の「を」の前の名詞は対応する。動かすことができる性質をもつ。

○文壇は急転直下の勢で目覚しい革命を受けている。凡てが悉く搖 くうご いて、新氣運に向かって行くんだから、取り残されちゃ大変だ ○ただ白い方が看護婦だと思ったばかりである。三四郎は又見とれていた。すると白い方が動き出した ○肝心の首脳の方が動かないで △もし薩摩が先に兵を動かしたら △中国の意のままに社会党が動くかどうかということで ○肥った画工のブラッシだけが動く ○車が動き出して二分もたったころ ○すると度盛が逆に動き出した ○望遠鏡の中の度盛がいくら動いたって ○やがて度盛が明るいなかで動き出した ○自分の足がいつの間にか動いていたという ○狭いところに割り込みながら、四方を見廻すと、人間の持つて来た色で目がちらちらする。自分の眼を動かすだけではない。無数の人間に付着した色が、広い空間で、絶えず各自に、かつ勝手に動くからである △ここでの食いこみが半年間の収入を左右するというわけである

他の例。

○学問は非常な勢いで動いているので ○然しあれで（雲が）地上に起る颶風以上の速力で動いているんですよ ○眼だけは動いた ○三四郎も誘われたように前へ動いた ○女の影は一步前へ動いた ○高い雲が空の奥にいて容易に動かない ○けれども動かすにもいられない。ただ崩れるように動く ○女は動かない ○けれども動かすにはいられない ○美弥子も動かない ○体も動かさない ○美弥子はやはり顔色も動かさない ○女は扇の広い髪を一寸前に動かして礼をした ○今夜は一つ聞いてみようかしらと心を動かした ○これには往来の人もみんな心を動かしている様に見える ○こういう紳士的な学生親睦会は珍しい。悦んでナイフとフォークを動かしていた ○……とブラッシを動かした ○女は肉の豊でない頬を動かしてにこりと笑った ○そうして凡ての下に三四郎の心を動かすものがある ○自分の眼を動かすからばかりではない ○今に動きます」といいながら ○三四郎が眼

を擧げると同時に女は動き出した ○列車は動き出す ○三四郎が動く東京の真中にとじこめられて ○谷の底にあたる所は幅をつくして（人が）異様に動く ○見ていると眼がつかれるほど不規則に動く ○それも眼に動くだけで耳は静かである

助詞「に」が移動先を示すために用いられることがある。「で」は用具の名詞について動かす用具、「勢い」「速度」について動くあるいは動かすはやさなどを示す。

(IV-28) 「停止」の動詞, 2. 1512, 「とまる」「とめる」「たちどまる」「とどまる」「とどめる」「停車する」など。他動詞の主語は人間。自動詞の「が」の前と他動詞の「を」の前とは対応する。人間, 動物や車, 汽車, 時計など, 動きのあるものがこの名詞の特徴である。例中の「ちょうちん」は, 人間がもつてあるくもの, であるが, やや文学的な表現といえよう。

○与次郎が西片町へはいる横町のかどで立ちどまつた △昼休のサラリーマンたちが立ちどまり, みつめるなかを △われわれがとどまるのは, アジアと…… ○三四郎がじっとして池の面をみつめていると ○やがて汽車がとまつたら, では御大事にと ○次の駅で汽車がとまつたとき, 女はようやく△急行「第8アルプス」が停車することになったため ○半町ほどくると提灯がとまつている ○角の出た石の上にせきれいが一羽とまったくくらいである △彼のいう「伝統」が単なる形の問題にとどまらず

「にとどまらず」は一種の慣用句。他の例。

○三四郎は声を掛けようかと考えた。距離があまり遠過ぎる。急いで二三歩芝の上を裾の方へ下りた。下り出すと好い具合に女の一人が此方を向いてくれた。三四郎はそれで留つた。 ○三人は入口の五六間手前でとまつた ○小走に与次郎が走〈かけ〉て來た。三分の二程の所で留つた ○半町ばかり來た時, 女は人の中で留つた ○女は腰を曲〈かが〉めた。三四郎は知らぬ人に礼をされて驚いたと云うよりも, 寧ろ礼の仕方の巧なのに驚いた。腰から上が, 風に乗る紙の様にふわりと前に落ちた。しかも早い。それで, ある

角度まで来て苦もなく確然〈はっきり〉と留った ○それで三四郎から一間ばかりの所へ来てひょいと留った ○又五六歩あるいたが、今度はびたりと留まつた ○眼だけは動いた。それも三四郎の真正面で穩かに留つた ○野々宮さんは、縁側から立つて、二三歩庭の方へ歩き出しが、やがて又ぐるりと向き直つて、部屋を正面に留つた ○右側に大きな西洋館がある。美弥子はその前に留まつた ○暗い路を戸毎の軒燈が照らしている。(二人ハ)その軒燈の一つの前に留つた ○この時計は常に狂つてゐる。もしくは留まつてゐる ○半町程くると提灯が留まつてゐる。人も留まつてゐる ○美弥子も留つた ○その囃の音が……又余波が三四郎の鼓膜の側まで来て自然に留る ○「実は佐々木が金を……」と三四郎から云い出した。「分つてゐるの」と中途でとめた。三四郎も黙つた ○出てくる人物が、みんな冠を被〈かむ〉つて、袴を穿いていた。そこへ長い輿を担〈かつ〉つて來た。それを舞台の真中で留めたものがある ○二三間先へ來ると、車を急に留めた ○原口さんは耳にも留めない風で ○四人とも足を留めてふりかえつた
「とる」「とめる」などは他の格として、「に」「で」をうけることがある。「に」は主として+loc. の名詞を受けて位格になり、「で」もそのことが多いが、「理由・原因」をあらわすことも少しある。

(1V-29) 「起立・横臥など」の動詞, 2. 1513, 「起つ」「すわる」「腰をかける」「腰をあげる」「ねころぶ」「よこたわる」「起きる」「起こす」など。他動詞の主語は人間。自動詞の「が」の前と他動詞の「を」の前は対応する。この名詞は、たとえば「起つ」「立つ」では、どちらかといえは、たてに長いもの、長くなりうるもの、の意味特徴をもち、「ねころぶ」「よこたわる」では横に長いもの、横に長いのびうるもの、の意味特徴をもつ。この名詞は人(1.2), 生産物・自然物(1.4, 1.5)などが主であり、他のはあいは、動詞の意味が転義的である。

○見ると野々宮君が石橋の向うに長く立つてゐる ○鏡の中に美弥子がいつの間にか立つてゐる ○爺さんが女の隣へ腰をかけた ○失礼しようか」と野々宮さんが腰をあげる ○たちまち与次郎が書斎の入口にすわつて ○隣

に田村という小説家がすわっていた ○間にしまの羽織を着た批評家がすわった ○決勝点は美弥子とよし子がすわっている真正面で ○美弥子とよし子が席を立った ○あがり口に、池の女が立っている ○野々君が立つとともに ○入口に四,五人,用のない人が立っている ○玄関によし子が立て ○すると、よし子が立った ○すると与次郎が突然立った ○この桜の下に二人の学生がねこんでいた ○普通の田舎者が始めて都会の真中に立って驚くと同じ程度に ○左手の岡の上に女が二人立っている ○そうすると、広田先生がむくりと起きた ○寝ていた男がむっくり起きて ○真白に塗り立てた娘が石膏の化物のようにすわっていたので △規則に反対して約三百人が旧館にすわっている △……党の議員が起ち (以上 1.2) △対策が立てられなくなり ○右手にかなり大きな御影の柱が二本立っている ○その後には又高い幟〈のぼり〉が何本となく立ててある ○大きな石の門が立っているのがある △両者の間に、くっきり断層が横たわっているとみえたこと (以上 1.4, 1.5) ○ちょっと明晰に区別が立たないものだから ○登場人物の腰がすわらない ○汽車だけがすさまじい音を立ててゆく

動作の行なわれるところは「に」で示される。+loc. である。他の例。

○そばに野々宮君を立たして ○三四郎は立ちながらうながすようにいって ○三四郎は立ちながら ○自分は立ちたくなった ○美弥子はその間に立てありかえった ○先生はこの坂の上に立って ○地面の上に立っているのが安全でいい ○無暗に便所か何かに立つ ○横町の角に立っていた ○正門の際に立った三四郎 ○勝手口に立って考えた ○精養軒の玄関に立てていた ○よく思われたいが先に立つ ○やはり正面に立っていた ○三四郎ははぎとすれすれに立った ○動かずに立っていると ○自分はあぶなくない地位に立っている ○活動の中心に立っている ○女は暗い所に立っている ○あなたは団扇をかざして高い所に立っていた ○広い原の中に立った ○女は秋の中に立っている ○女は雨の中に立って ○せまいかこいの中に立った女 ○舞台のはじに立った与次郎 ○美弥子の真前に立った ○東京の真中に立って ○舞台の真中に立って ○むこうに立っていた一人の学生

○むこうに立っている美弥子 ○うまいぐあいに男は立った ○ねれても立っている ○いすを立つ ○席を立つ（5例） ○あんな銅像をむやみに立てられては ○石の門の歴史を話した。……あすこへ立てたのだと云う ○ひとりですわっている（3例） ○端然とすわっている ○書斎の入口にすわって ○座蒲団の上にすわって ○草の上にすわった ○二人はその下にすわった ○筋向こうにすわった男（2例） ○隣にすわった男 ○小川のふちにすわったこと也有る ○机の前にすわって ○たたみの上へすわった ○そこへすわった ○枕許へすわった ○めいめい勝手なところへすわる ○美弥子はこんなところへすわる女かもしない ○学生生活の裏面によこたわる思想界の活動 ○例刻におきて学校へ行くつもり ○おそらく起きていた ○いつものようにおきるのがつらかった

このグループ全体として2.3のグループの動詞（2.333のあたり）と関連がある。主語に人が多い（自動詞でも）のはそのためである。また「起きる」「起こす」は2.122（「事件が起きる」など）とも関係がある。「疑いをおこす」などはむしろこちらに入れた方がよいかもしない。

（IV-30）「傾斜・転倒」の動詞、2.1514、「ころがる」「ころがす」「かたむける」「かたむく」「たおれる」「たおす」「ひるがえる」など。他動詞の主語は人間。自動詞の主語と他動詞の「を」の前が対応する。「ころがす」「ころがる」については、この名詞は丸い感じのもの、回転可能の形のもの、「かたむく」「かたむける」「たおす」「たおれる」については「立つ」などと対応するもの、「ひるがえる」は「旗」など、ぬののような感じのものである。ひゆ的な用法もある。

○毛糸のたまがベッドの下にころがった △多くの努力が傾けられることを示唆する △女の悲鳴が聞こえ、人がたおれる物音がした △物干台には四季を通じてゆかたがひるがえっているが

他の例。

○三四郎は首を傾けた ○耳を傾ける（6例）——例 一座は耳を傾けて聞い

ていた ○(建物が) 法文科みた様に倒れそうでない
「耳を傾ける」は一種のイディオムであろう。

(1V-31) 「据え・置き・つり・掛け」などの動詞, 2. 1515, 「敷く」「置く」「する」「かける」「かかる」「さげる」「さがる」「ぶらさがる」「たれる」など。他動詞の主語は主として人間, 自動詞の主語と他動詞の「を」の前の名詞は対応する。「敷く」の名詞は置かれた状態が横に長く平らになるもの, 「置く」「する」以下は全体で一つにまとまっているもので, これらのグループ全体として, この名詞は, 自然物, 自然現象, 人間の生産物, などであり, 一般に具体的なものである。生物人間のばあいもあるが, 人間としての待遇でないことが多いであろう。抽象的なものであることもあるが, 動詞の表現がひゆ的, 転義的であるといえよう。

○長方形の御影石がとびとびに敷いてある ○まず一部分にはじゅうたんが敷いてある ○隣りに乗り合わせた人が, 新聞の読みがらをそばに置く ○そのとき原口さんが, とうとう筆をおいて ○部屋の中を見廻すと真中に大きな長い櫻の机〈テーブル〉が置いてある ○座敷の真中に美弥子の持ってきた籃〈バスケット〉が据えてある ○広田先生の所へ行くと女の裸体画が懸けてあるから △勘亭流で書かれた表札がかかり ○空には高い日が明らかに懸る ○心持黄な色がふうと一面にかかっている △鉄線がどうしてひっかかったのか, 保線区員が調べたところ ○木の下を通るので, 帽子が松の枝にひっかかる ○裏の椎の木に蜜蜂が二三百匹ぶらさがる ○空が低くたれている

やや転義的, ひゆ的な表現。

△「技術輸出」に重点が置かれているというが △ひたむきな努力だけがその作品を支えていて ○三四郎がぞうきんをかける ○するとその子が結婚に信仰を置かなくなる

他の例。,

○その真中に足掛けの為に手頃な石を置いたものがある ○成程珍しく屋根

に瓦を置いてなかった ○やがて二人の間に果物を置いて「食べませんか」と云った ○その前に長い腰掛を置いた ○「先生二階へは是非佐々木を置いてやって下さい」と与次郎自身が依頼した ○広田先生の話し方は、丁度案内者が古戦場を説明する様なもので、実際を遠くから眺めた地位に自らを置いている ○三四郎は頭の中にこの標準を置いて ○早速本を置いて ○美弥子の傍に野々宮さんを置くとなおくるしんでくる ○黒い眼をさも物憂そうに三四郎の額の上に据えた ○日当りの好い石の上に据えてやった ○移り易い美しさを移さずに据えて置く手段が、もう尽きた ○二人が板の間に据えてある器械の上に乗って、身長を測ってみた ○椅子にかけたはおり ○戸の後ろにかけてある幕 ○かべにかけたのばかりでも大小合わせると余程になる ○丹青会はこれを一室の正面に懸けた ○黒塗の札に野々宮よし子と仮名でかいて、戸口に懸けてある ○板の間にかけてある三越呉服店の看板 ○きのうからきょうへかけて ○花道から出口へかけて ○やさしいことばもかけず ○相談をかける（2例） ○新聞に手をかけながら ○倚にはぬぎすてた羽織をかけた ○めがねをかけて（4例） ○君の様に金にかけるとのんきなのが多いだろう ○そのかわり学間にかけると非常に神経質だ ○上へかけるものも真白である ○われわれはそういう方面へかけると全然無学 ○心配をかける ○迷惑をかける ○今頃でもうすいリボンをかけるものかな ○二人の間にかかっているうすい幕の様なもの ○野々宮君は思う物を探し宛てなかったと見えて、元の通りの手を出してぶらりと下げた ○頭をさげた（3例） ○かごをさげて ○ふろしきづみをさげて（2例） ○二人は手拭をさげてかけた ○バケツを下げた三四郎 ○バスケットをさげている

以上のうち「きのうからきょうへかけて」「花道から出口へかけて」の二例は「から」「へ」または「に」の呼応があり、その前の名詞の意味にも呼応がある。「学間にかけては」などの用法もまた転義的である。これらを除けば上に述べたとおりである。

このグループの動詞は「に」格をとり、「据え、置き、つり、掛け」などの場

所を示している。全体としてみると+locative のものが多いだろう。

このグループ以外のものでも同様であるが、「裸体をかける」のような表現は「裸体画をかける」の意味で使われている。そう解すると本来なら「人間の行動」の名詞になるはずであるが、この項ではそう扱わなかった。それは「人間の生産物でもある。ここではそのように解するのがよからう。そこで分類語彙表としては、「1.3」の名詞を再分類してみる必要が考えられる。

(1V-32) 「はめ・うずめ・投げ」などの動詞, 2. 1516。「はさまる」「はさむ」「うさまる」「うずめる」「うめたてる」「もぐる」など。他動詞の主語は人間。自動詞の「が」の前と対応する他動詞の「を」の前は対応する。

○下駄の歯があぶみにはさまる △大阪市が都市美観と環境整備のため道頓堀川の両側の一部をうめたてると △一万三千そぞこの小さな町が、隣の上山田町と共同で三億二千四百万も投じ

他の例。

○金は帳面の間にはさんでおいた筈である ○画筆を指の股に挟んだまま、三角に刈り込んだ髪の先を引いて笑った ○耳の後へ洋筆〈ペン〉軸を挟んでいる ○聖徒イノセントの墓地に横わるは猶埃及〈エジプト〉の砂中に埋まるが如し ○二十三頁の中に顔を埋めている必要がなくなった ○与次郎はくるりと引っ繰り返って、幕の裾を潜〈もぐ〉って何処かへ消え失せた
○三四郎は又暖い蒲団のなかに潜りこんだ

自動詞の「が」の前は自然物、生産物、用具などが多い。つまり—animate であることが多い。「ふてんのなかにもぐりこむ」などでは、主体は人間である。「はさまる」「はさむ」などでは、一般にうすいとかほそいとかのイメージを伴うことが多いかもしれない。

一般に「に」を伴う。「に」の前は+locative であることが多いが、そうでないこともある。そのばあいも、temporary な+locative と考えられる。

(1V-33) 「移動・発着」の動詞, 2. 1521。a) 「かけつける」「でかける」「殺

到する」「席につく」「ふみきる」「もって来る」「もっていく」「わたす」「おくる」「とどける」 b) 「うつる」「わたる」「つたわる」「こす」「到着する」「達する」「つく」「もたらす」 c) 「とどく」「発車する」「着陸する」「とびたつ」「漂着する」「及ぶ」など。 a) は主として人が主語、 c) はもの、 車など、 b) はその両者が主語になる。全体として自動詞が多いが、「とどく」「とどける」のように自他の対応のあるものでは、名詞の対応がある。

○停車場 〈ステーション〉の方から提灯を点けた男が鉄軌 〈レール〉の上を伝って此方へ来る ○悪魔が乗り移っている ○野々宮が此処へ移ってから三四郎は二三度訪問した事がある △政府軍の兵士が戦車のところに駆けつけたところ ○番頭が只今一寸出ましたから、帰ったら聞いて参りましょう
○三四郎が今夜でかけて来たのは △ここから二人が更に水深 25 メートルに置いた深海別荘に出かけてゆき △夜行組が殺到することが予想される
△このため山田氏が委員長席につき ○向うには庄司という博士が座に着いた ○あなあが里見さんのところへお移りになるというのは本当ですか △米国が B 52 ショーに踏み切ったのは ○小僧が奥からいろいろ持ってきたのは ○下女が茶を持ってきて ○台所から下女が茶を持ってくる ○下女が茶をもって来る間 ○美弥子は与次郎に金を貸すと云った。けれども与次郎には渡さないと云った。実際与次郎は金銭の上に於ては、信用し悪くない男かも知れない。然しその意味で美弥子が渡さないのか、どうだか疑わしい。もしその意味でないとすると、自分には甚だ頼もしいことになる。ただ金を貸してくれるだけでも十分の好意である。自分に逢って手渡しにたいと云うのは ○給仕が酒をもって出る ○必ず与次郎が (金ヲ) 持ってきてくれる —— とまでは無論彼を信用していないのだが ○下女が宿帳をもっててきた △われわれがもってきてきたすべての問題 ○与次郎がまた、耳のそばへ口をもってきた ○実はお国のおっかさんがね、せがれがいろいろお世話になるからといって結構なものを送ってくださった △注文で出されたものは全部外国から送られてきた機械で ○国から金が届いたから ○小包が届いたとき △下り列車が発車できなくなり ○汽車が豊橋へついたとき

△ソ連が月世界に着陸する有人衛星をつくるのは △インド空軍のジェット機一機が22日、アッサム州カラハチ空港に着陸しようとして △午後二時半ヘリが飛び立ち救出に向かった ○お客様が帽子と外套を給仕に渡して ○なるほど白い雲が大きな空を渡っている ○風が女を包んだ。女は秋の中に立っている。「あなたは……」風が隣へ越した時分 ○そのなごりのひびきが、東京にいる時分の耳にかすかに届いた △爪が届くかというとき △相手が潜水艦では手が届かず △孝江ちゃん（8つ）の遺体が岸壁に着き △船体の破片などが漂着した ○絵の中の気分がこっちへのりうつる △パリコレクションがただいま到着しました ○万一わざらいが広田先生に及ぶようでは

次の例は内容は種々であるが、動詞の用法が転義的なもの、他動詞の主語が人でないもの、その他である。

○気楽なら好いけれども。与次郎のは気楽なのじゃない。気が移るので——例えば田の中を流れている小川の様なものと思っていれば間違いはない。浅くて狭い。しかし水だけは始終変っている ○眸と瞼の距離が次第に近づく様に見えた。近づくに従って三四郎の心には女の為に出なければ済まない気が萌く（きざ）して来た。それが頂点に達した頃女は投げる様に向うをむいた△全般の停滞が業績低下をもたらした △「開発」の研究成果がもたらした大きな波紋 △この政策がもたらす結果はただひとつ ○風がもってきてすてていったように ○都合がついて質をうけだして ○どこも月末で都合がつかない ○それはとうてい見込みがつかない ○話が一段落つくと △いっこうに話し合いがつかず △野党側と話し合いがつけば △すでに日ソ両国が了解に達していた △すべての証券会社がその目的を完全に達成したとは ○それからそれへと頭が移ってゆくうちに

他の例。

○すぐ大久保へ出掛けて見たくなる ○暇さえあれば下宿へ出掛けといって一人一人相談する ○三四郎はその夕方野々宮さんの所へ出掛けたが ○团子坂へ出掛けるには当らない ○こう云う帳面を持って度々豊津まで出掛け

た事がある ○三四郎は又隠袋〈かくし〉へ手を入れた。銀行の通帳と印形を出して、女に渡した ○野々宮さんは、「何、大して面倒でもありませんがね」とすぐ机の抽出〈ひきだし〉から預かったものを出して、三四郎に渡した ○帳面と印形を掛のものに渡して ○不都合がないと認めたら金を渡してくれろ ○引き易に金を渡すものからは無論即前に受け取るが ○御金はここにありますがあなたには渡せません ○すぐ受取ったものを渡そうとして ○国から送ってきたばかりのかわせ ○始めのうちは音信〈たより〉もあり、月々のものも几帳面〈ちゃんちゃん〉と送ってきたからよかったです ○この時自分も何か買って、鮎の御礼に三輪田のお光さんに送ってやろうかと思った ○三四郎は丁寧な礼状を美弥子に送った ○依頼の金は野々宮さんの方へ送ったから、野々宮さんから受取れ ○改札場の際までおくってきた女 ○美弥子は玄関まで送ってきた ○私の傍まで来れば交番まで送ってやるわ ○野々宮さんは、妹を送って里見まで連れて行ってやるだろう ○親から月々学資をおくってもらう身分 ○与次郎は広田先生と原口さんに招待券を送ったと云っている ○三四郎はつまらんものを送ったものだと思った ○帰るときに、序だから、午前中に届けて貰いたいと云って、裕を一枚病院まで頼まれた ○実は必要な二十円を下宿へ払って残りの十円をその翌日すぐ里見の家へ届けようと思ったが ○迷子はとうとう巡査の手に渡ったのである ○すると美弥子は石の上にある右の足に、身体の重みを託して、左の足でひらりと此方側へ渡った ○三四郎も食付いて向うへ渡った ○何時の間にか河を向うへ渡った ○二人はすぐ石橋を渡って左へ折れた ○二人は石橋を渡った ○手を出している間は、調子を取るだけで渡らない ○三四郎は美弥子から洩れて、よし子に伝わって、それが野々宮さんに知れているのだと判じた ○原口さんは舞台を降りて、人と人との間を伝わって、野々宮さんの傍まで来た ○先生、折角大久保へ越したが、又此方の方へ出なければならない様になりそうです ○大久保へ越したのも、或はそんな経済上の都合かも知れない ○ここへ越してからまだ一度も行かない ○そんなに急いで越すのかと」三四郎がきくと ○「急ぐって先月中に越す筈

のところを明後日 〈あさって〉の天長節まで待たしたんだから ○谷を越すとすぐ向うである ○結果は頗る平凡である。けれどもこの結果に到着する前に色々考えたのだから ○一番に到着したものが、紫の猿股を穿いて婦人席の方を向いて立っている ○その不便が段々高じて極端に達した時利他主義が又復活する ○濃く真直に逆 〈ほとば〉 しる時は、哲学の絶高頂に達した際で ○そこで本人の目的は達せられる ○勘定をして宿を出て、停車場 〈ステーション〉 へ着いた時 ○会場へ着いたのは殆んど三時近くである ○そのうち汽車は名古屋へ着いた ○名古屋へ着いたら迷惑でも宿屋へ案内してくれ ○九時半に着くべき汽車 ○パリへ着くやいなやたちまち豹変したそうですね ○三四郎は下から、よし子の蒼白い顔を見上げた。始めてこの女に病院で逢った昔を思い出した。今でも物憂げに見える。同時に快活である。頼りになるべき凡ての慰籍を三四郎の枕の上にもたらして来た ○三四郎はこの手紙を見て、何だか古ぼけた昔から届いた様な気がした ○国から金が届いたから取りに来てくれたまえ ○小包が届いた時、一応着てみて ○足は床に届かない ○学資は毎月月末に届くようにするから安心しろ ○御馳走に届くまでは廷びるそうです。

場所を意味する名詞に、助詞「へ」「に」「から」「まで」などがつく。「発着」の「発」が「から」、「着」がその他である。この名詞は大体が+loc. であるが、そうでなく、臨時に場所の意味をもつものもあることがある。「渡す」「贈る」「とどける」などは、多くあるいはすべてのばあいにこの名詞が人である。対人行為の動詞のばあいである。「わたる」「こす」などは場所の意味の名詞に「を」がついて通過点を示す。

「渡る」「渡す」「届く」「届ける」など意味に対応のあるものでは、「が」「を」の前で名詞の対応がある。これらは主として金品である。

(1V-34) 「走り・飛び・流れ」などの動詞、2. 1523。「走る」「走らす」「飛ぶ」「はずむ」「はずませる」「ながれる」「ながす」「ただよう」「はう」「すべる」「まわる」「めぐる」「うずをまく」「出まわる」。他動詞の主語は人。自動詞が

多く、基本的な用法では主語は自然物が多いが、転義的・ひゆ的な用法ではその他のものが主語になる。

○綿の光ったような濃い雲がしきりに飛んでゆく △下から羽のはえた悪魔が空を飛んでおっかけてきます ○一番低い所に小川が流れている ○二人の足の下には小さな川が流れている ○……ら七人が突風のため海岸に押し流されて △鎌倉逗子方面で悪臭が漂い始めており ○裸体の女の腰から下が魚になって、魚の胴がぐるりと腰をまわって、向う側に尾だけ出ている
△当時は左翼の文献が洪水のように出まわり ○この黒い影が地の上をはって ○その不便が段々高じて極端に達した時利他主義が又復活する。それが又形式に流れて腐敗すると又利己主義に帰参する △第八期審議会がやっとスムーズにすべり出し △やはりそうかという表情が傍聴席にさっと流れる
△楽しかったお正月の話がはずんだ △「さすらいの口笛」のテーマが流れている

他の例。

○縁側は南天を基点として斜に向うへ走っている ○この丘とはまるで縁のない小山が一段低く、右側を走っている ○ことに青木堂で茶を飲んで煙草を呑んで、自分を図書館に走らしてよりこのかた、一層よく記憶にしみている ○薄笑いをしただけで、又洋筆〈ペン〉を走らし始めた ○与次郎の話はそれからそれへと飛んでゆく ○忽ち五六人の男が飛んで出た ○三四郎は石の扶〈たすけ〉を藉〈か〉らずに、すぐに向うへ飛んだ ○みんな息をはずませているように見える ○例えれば田の中を流れている小川の様なものと思えば ○例の女が入口から、「ちいと流しましょうか」と聞いた

助詞「へ」「に」が場所を意味する名詞について、方向、目的地を示し、「を」がやはり場所を意味する名詞について経由点を示す。「走る」の主語は本来動くものであり、「人」や「車」が主であろうが、「縁側」のようなばあいは転義的であろう。「飛ぶ」のばあいも「飛行機」や「雲」であろう。「流れる」は「川」が多いが、「川」のなかを浮んでながれるものもある。

(1V-35) 「通過」の動詞, 2. 1524 「通る」「通す」「貫く」「ぬける」「横切る」など。「通る」の主語は人, 車など動くもの。「通す」の「を」の前は人や車もあるが, 糸や綱もある。「通す」の主語は人。「貫く」「横切る」や「通る」のばあい, 本質的には動かなくても, 動くものに準じて扱う表現が可能で, 少なくない。「貫く」「横切る」は他動詞と考えられるが, 「を」の前の名詞の性質は自動詞のそれに類似して, 場所, 準場所のことがある。

△私が中国を通ってハノイへはいった ○窓の外を楽隊が通ったんで ○学校の帽子をかぶった生徒が大分通る ○自分がこじきの前を通るとき ○学生が多く通る △目の前を八高線の汽車が煙をはきながら通っている ○電車がしきりに通る ○馬車や車が何台となく通る △二日おきに低気圧が通るので ○着物の色は何と云うか分らない。大学の池の水へ, 曇った常磐木の影が映る時の様である。それを鮮やかな縞くしまが上から下へ貫ぬいている。そしてその縞が貫きながら波を打って, 互に寄ったり離れたり, 重なって太くなったり, 割れて二筋になったりする ○美弥子の立っている所は, この小川が, 丁度谷中の町を横切って根津へ抜ける石橋の傍である ○ただ鼻筋が真直に通っている所だけが西洋らしい ○悠然としてふとくたくましい棒が二本穴をぬけてくる ○与次郎がここをぬけて道灌山へ

他の例。

○そんな事を考えて森の下を通ってゆくと, 突然その女に逢った ○なにこれは佐竹の下屋敷で, 誰でも通れるんだから構わないと主張するので, 二人共その気になって門を潜って, 蔽の下を通って古い池の傍まで来ると ○ところへ汽車が轟と鳴って孟宗蔽のすぐ下を通った ○道があるなら, あの唐辛子の傍を通って行きたいという ○この夏ある所を通ったら婆さんが二人で問答していた ○前を通った事は何遍でもある ○三四郎の横を通って, 自分の座に帰る ○高等学校の横を通って ○しばらく河の縁を上るともう人は通らない ○一日待っていても誰も通らないかもしない ○いつまで待っていても誰も通りそうにありませんね ○本来は暗い夜である。人の力で明るくした所を通り越すと ○だまっていると前を通りぬけてしまう ○

与次郎も三四郎も、成程としましたま、御寺の前を通り越して ○例の女はすうと立って三四郎の横を通り越して車室の外へ出て行った ○あまり無分別の度を通り越しているので意見をする気にもなれない ○萩を通り越して縁鼻まで来た ○多くの松を通り越して左へ折れると ○その眼は流星の様に三四郎の眉間を通り越えて行った ○白い棺は奇麗な風車を瞬間に揺かして、三四郎の横を通り越した ○二人の女は三四郎の前を通り過る ○三四郎は茶の間を通り抜けて、廊下伝いに書斎の入口まで来た ○その間を電車がぐるっと曲って、非常な勢で通る ○三四郎は此処を通る度に、里見恭助という人はどんな男だろうと思う ○ところへ又汽車が遠くから響いて来た。その音が次第に近付いて孟宗藪の下を通る時は、前の列車より倍も高い音を立てて過ぎ去った ○提灯の影は踏切りから土手下へ隠れて、孟宗藪の下を通る時は、話し声だけになった ○馬が云う事を聞かないで、意地を悪くわざと木の下を通るので、帽子が松の枝に引っかかる ○さっきの女の影が見えた。並んで岡の裾を通る ○妹が学校へ行き帰りに、戸山の原を通るのが厭だといい出しましてね ○窓の前を通る時二人の話を熱心に聞いて見たが些とも分らない ○赤門の前を通るはずの電車 ○どうぞと云うからついて上ると応接間へ通した ○野々宮さんは腰を立てて原口さんを通した ○袖から袖へ幔幕の綱を通して ○どんな本を借しても、きっと誰か一度は眼を通している ○一直線に生垣の間を横切って、大通へ出た ○やがて黒板をはなれて、芝生の上を横切ってきた。

「通る」は+locativeの名詞に「を」のついた補語をとる。「通す」は「人をどこに通す」「穴に糸を通す」のような表現になる。「眼を通す」は一種のロキューションであろう。

(1V-36) 「追い・逃げ」などの動詞, 2. 1525。「すぎる」, 「追う」「追いつく」「おいやる」「ついてくる」, 「かよう」など。「追う」以下の主語はやはり移動性。人, 車, 自然物など。

○あとから女がついてくる ○第二の美弥子が、この静さのうちに、次第と

第一に近づいてくる。……第二の美弥子が漸く追付いてくる △わたしたちの仲間では、家庭のことが木村君を死に追やったとみている ○それでこやのなかは、空気が通わなくなつて

他の例。

○時期はすぎていた ○三四郎は急いで追付いた ○与次郎は一緒についてきて損をしたと云わぬばかりに ○女は何とも云わずについてくる ○美弥子のうちから学校へかよう ○毎日学校へ通つて ○河は真直に北へ通つている。

「すぎる」は「を」、「かよう」は「に」で場所を意味する名詞にむすびつく。「すぎる」は時間、程度の規準などを意味する名詞と「を」を介してむすびつく。

(1V-37) 「進退」の動詞, 2. 1526。「進む」「進める」「退く」「引く」など。他動詞の主語は人。自動詞の主語はいろいろである。自然現象のはあいは場所的空間的変化と時間的変化が多いだろう。人間が主語のこともあり、このばあいは空間的と思われる。人間の行動に關係するときは、事態の変化に関することが多いように思われる。場所的変化は「に」でその位置を示すことがあり、その名詞は+loc. である。

△ことしはベビーブームの波が引いたあとで △東シナ海の低気圧が東進しているので △吉信が二条城を退却 △仏がNATOを脱退 △まず双方が武器を引いて和平の話し合いをする △その準備が進んでいる △更に就業が進むにつれて △カルテル結成による生産調整が現在各協議会で進められている ○ことがうまくいって、しらんかおをして △それが、二幕目になるといつしか両者ののはげしいのしりあいに発展する ○こんどは我意識が非常に発展しすぎてしまう △アメリカよりも次進国日本の方がずっとすすんでいる

他の例。

○秋は高くなる。食欲は進む ○三四郎は自分から進んで人の機嫌を取つた

ことのない男である ○知らず知らずの間に、五頁六頁と進んで、ついに二十七頁の長論文を苦もなく片付けた ○三四郎はこの苦悶を払おうとして真直に進んでゆく ○実際今日の文権は全く吾々青年の手にあるんだから、一言でも半句でも進んで云えるだけ云わなければ損じゃないか ○今夕の麦酒と珈琲はかかる隠れたる目的を、一步前に進めた点に於て、普通の麦酒よりも珈琲よりも百倍以上の価値ある貴〈たと〉き麦酒と珈琲である ○原口さんの画筆はそれより先には進めない ○運動の歩を進める（他 2 例） ○大勢の後から、こぞきこんだだけで、三四郎は退いた ○三四郎はおもわず顔を後へ引いた ○両手を伸ばして、首をあとへ引いて

(1V-38) 「出入り」の動詞, 2. 1530. 「はいる」「入れる」「出る」「出す」「……だす」「……でる」など。他動詞の主語は人。自他に対応のあるとき自動詞の主格と他動詞の対格が対応する。自動詞に経由点 (+loc.) の「を」、がつくことがある。+loc. の名詞あるいは臨時に場所の役をするような名詞に「に」「へ」がつき、出発格の「から」がつく名詞がある。「はいる」「出る」の主語は人であることがかなり多いが、そうでないばあいも少なくない。

○若い美人が出入するといううわさがある 【人が「出る】 ○三四郎がはじめて教室へはいって ○そこへ威勢よく与次郎がはいってきた ○どこへどんなところがはいったか一目にわかるよう ○三四郎の視線のうちには是非共これらの壯漢がはいってくる ○庭の木戸がぎいと開いて、野々宮さんが這入ってきた ○与次郎と敷居際ですれちがって、原口さんが這入ってきた ○この女が車室にはいってきたとき ○書斎の戸をあけて自分が先へはいった ○自分がこの世界のどこかへ這入らなければ、その世界のどこかに欠陥が出来る様な気がする △農民ら八人が、八相権の消滅した山林にはいり木を切った ○与次郎が門をはいるのとが 【その他の「はいる】 △まだ籍のはいっていない内縁の妻 △英國議会にはじめてテレビカメラがはいり △番組に正真正銘の「ちゃっきり節」がはいっている ○海運株などに大口の買物がはいり △二万株の成行買がはいった 【イディオマティク】

○この時女の帯の色がはじめて三四郎の目にはいった　○あれを読んでおかないと僕の用事が頭に這入り悪くにくく　△この文書がどういう経路で西側の手にはいったか　【「はいっている」——「いれる」の「を」に対応】○なにかサンドウイッチがたくさんはいっている　○なかにはたるがきがいっぱいはいっている　【「いれる】】○大きなガラスのはちに水がいれてある　△あとはスイッチが自動的に電気を入れる　【その他の「はいる」系】△児童99人がま新しい紺の制服で行動入りした　△覆面した二人組みの男がおし入り　△事務所に強盗が押し入ったが　○新しい家が往来から二三軒ひっこんで　【人が「出る】】△四十七人が出稼ぎに出ており　○たちまち五六人の男が目の前に飛んで出た　○すると突然原口さんが幕の間から出てきた　○先生がベルがなって十五分たっても出てこないので　○君が舞台の上に出てきて　○野々宮さんが庭から出でいった　○そのかわりおれの方が出るから○二人のあとから続々聴講生が出てくる　○明瞭な女が出てきた　○あなたが出ておしまいになれば　○与次郎が手すりのところまで出てきた　○なかから人が出る　○池のそばまでくると番人が出てきて　○15号は三四郎が今出てきた部屋である　○けれども相手がいつもああ出るとすると　○髪結床の職人が大勢出てきて　○三四郎が玄関へ出ると　○案の如く三輪田のお光さんが出てきた　○アシェケナージがこのコンクールから出てくる　△期待して買っていた目先筋が、期待通り合併比率の改善がきまって売りに出たようで　○用談があって人と会見の約束などをする時には、先方がどう出るだろうと云う事ばかり想像する　【自然物・自然現象が「出る】】△工場南側の壁から煙が出ているのを従業員が見つけ　○またひとねいりするとこんどは汗が出た　△昨年から足にむくみが出て　△この美しい顔から涙が出た○豚などは手が出ない代りに鼻が出る　○あの女は反っ歯の氣味だから、ああ始終歯が出るんだそうだが　○縄糸の襟からのどくびが出ている　○渦が出ると、大変に叱られる　○月のそばに白い雲が出た　○空に美弥子の好きな雲が出た　△小ぶな、へらが出はじめた　△小糸川上流ははやが百尾近く出る　○かむと味が出る　○味が出るまでかんでいちゃ　△ぬつただけでみ

ごとなつやがれます ○聞きうることのできない色が出る ○三四郎の体がまだ扉のかげを出ない ○のめりそうに胸が前に出る ○きれいな手が二の腕まで出た ○どうも好きなものには自然と手が出るものですね ○ひげのはじめがこく出でている ○煙がしきりに出る ○左の手がこしにそったまま前へ出た ○そこから顔が出た 【1.3関係】△災害原因の鑑定書が出て △異常乾燥注意報が出っぱなし ○答えようとしたがちょっと声が出なかった ○ドイツの哲学者の名がたくさん出て来て ○何故、君の名が出ないで僕の名が出たものだろうな ○新しい本の名が出てくる ○とうとう三四郎の名前が出てきた ○白い歯の間から出た ○また与次郎の悪口が出た ○いろいろな批評が出る △住民のうったえが出ている ○大変苦情が出た ○とことわるだけの勇気が出なかった ○まるで分別が出なかった ○一種の表情が出てくる △日程が十分とれないおそれが出てきた △買上ったつかれが出てきたのだろう △改正案が出て採決されても ○思うような結果が出てきません △設備投資の動きが出て ○ことしの米は今に値が出るから

【1.4】○そのなかから矢が二本出でている ○君、九段の燈明台を知っているだろう」と又燈明台が出た ○ビルジングのアングルのところだけが少し出でている ○妙な看板が出でている △毎月百枚近い新盤が出て ○三四郎が色々考えるうちに、時々例のリボンが出てくる ○やがてコーヒーが出る ○果して原口という表札が出でていた ○柱に里見恭助という表札が出でている ○一枚の活版ずりの葉書が出てきた ○あとから3が出る ○そのあとから4が出る ○5が出る ○下に2の字が出た △やがてすぐれた論文が出はじめた ○あの小説が出てから ○ベーコンの論文集が出た ○「左翼劇場」という本が昭和の初めに出たこと △相当きつい値下りをした銘柄が出た

【「出す」】なければぼくが出しておくから △二三百余の修正案が出されたが △搜索願いが出されていた △テレビ局の免許申請が出されれば ○心が外へ店を出でているところ ○そのなかで木戸番ができるだけ大きな声を出す ○植えこみの松のむこうから与次郎が大きな声を出した ○ところへ例の男が首をうしろから出して ○……の方をですか」と与次郎が口を出し

が指導にくりだしたが ○玄関の代わりに西洋間がひとつつき出していて
○そのかわり枝が半分往来へ逃げ出して △国会議員が乗り出す △採用を
手控えていた商社が、最近になって求人に乗り出した ○すると与次郎が少
し前に乗り出してきた ○ポケットから半分封筒がはみ出している ○原口
さんが無理にひっぱり出した ○材木がほうり出してある ○敷物として敷
いたといふよりは色の好い、模様の雅な織物として放り出した様に見える
△最終段階になってソ連側が持ち出した問題は ○……じゃないか」と筋向
きの博士が比較を持ち出した △それに今回は生活苦がにじみ出ている女の
役を △Mさんが走り出ると

他の例。

【はいる】○弥生町の門から這入った ○急いで這入って行くのを見て、自
分も足早に入場した ○一口女にどうですと相談したが、女は結構だとい
ふんで、思い切ってずっと這入った ○野々宮君の穴倉にはいって ○図書館
にはいった ○教室にはいって ○二時間ほど読書三昧にはいった ○二人
は大きな杉の下にはいった ○案内も乞わずに廊下伝いに這入ってくる ○
安心して床にはいったが ○床にはいってから ○すこやかな眠りにはい
った ○大学の病院にはいっているんですか ○「森の女」の部屋にはいった
○三四郎の眼にはいった(3例) ○湯にはいって(2例) ○しきいの(へ
やの) うちへはいった(2例) ○今年また選科また選科へはいったのだと
うだ ○図書館へはいった ○画室へはいった(2例) ○教室へはいって
(2例) ○大学校へはいって ○小屋へはいった ○自分が先へはいった
○そのなかにはいって ○谷へはいった ○大学へはいった ○床へはい
った ○あんなところへはいったことがない ○青木堂へはいった ○(店な
どの) なかへはいった(て)(6例) ○西片町十番地へはいって ○自分の
部屋へはいって ○だれか便所へはいったようす ○店へはいった ○唐物
た ○隣にいるしまの羽織の批評家が口を出した △地元の伊勢崎署が「硫
酸魔警戒班」を出し 【「……だす」「……でる】○あまり水が多過ぎたのと、
筆の使い方が中々不慣なので、黒いものが勝手に四方へ浮き出して △役員

屋へはいった ○細い横町へはいって ○下女もはいってきた ○図書館へ
もはいったが ○自分ももとよりはいっていたのである ○赤門をはいって
○校門をはいってくる ○門をはいってから ○光線は厚い窓掛にさえぎら
れて充分に這入らない ○目にはいらなかったもの ○この世界のどこかに
はいらなければ ○控室にはいらなかった ○折角門内にはいられる機会を
○演芸場にはいりきれない ○頭にはいりにくく ○あの木の影へはいりま
しょう ○三人連れではいりこんで ○くぐりからはいると玄門までの距離
は ○勝手口からはいると ○庭からはいるべきのか ○図書館にはいること
を知った ○教室にはいる時分 ○大学にはいる ○構内へはいると ○
書庫へはいる権利 ○大学へはいる ○控室へはいる ○へやへはいる ○
西片町へはいる ○はいるのははじめてである ○正門をはいると ○……
門をはいる (6例) 【いれる】 ○勘定に入れて ○大きな行李へ入れて
○それを質に入れて ○封に入れて ○座敷に入れたまんま ○名刺をたも
とに入れた ○戸棚へ入れて ○へやのなかに入れて (2例) ○あたまの
なかに入れておいた ○これをはこに入れて ○封筒ごとふところへ入れた
○紙包をふところへ入れた ○手をポケットへ入れて ○寄宿舎へでもいれ
て ○ぜひとも日本人を入れてもらおう ○足へ力を入れて ○……に(へ)
手を入れて ○ふところへ手紙を入れて ○五万人もいれた ○湯沸しにあ
つい湯を入れて ○大学へ入れる ○書物を西洋間に入れる ○外へ出て風
を入れるさ ○外国文学講師を入れる ○こういう思想をいれる余裕はない
○ポケットへ手を入れると ○七千人を入れる席 【出る】 ○自分は田舎
から出て ○きみは九州のいなかから出たばかり (2例) ○与次郎のもその
うちから出ている ○今夜の会費もそのうちから出ている ○家のかけから
出て ○講師は教室から出ていった ○この答えは美弥子の口から出たとは
思えなかった ○便所から出てきた教授 ○answer という字はアングロサ
クソン語の andswaru から出たんだと云う事を覚えた ○鉄砲をかついで出
た ○見に行ったってそれで出てくるような男じゃない ○とうとうこらえ
きれないで出てきたの ○きょうは使いに出ました ○君行くなら一緒に出

ましょう ○そこまでで一緒に出ましょう ○その光景が十通りにも二十通りにもなつていろいろに出てくる ○送りに出てきた ○理科学校とかに出ているそうだから ○ちょっと買物に出ました ○給仕に出た下女の顔 ○午後は大教室に出た ○……の講義に出た（2例） ○散歩に出た ○論文は雑誌に出ましたが ○身体の方はあまり洗わずに出て ○女の為に出なければすまない ○与次郎に対してはあまり丁寧過ぎる。広田に対しては少し簡略すぎる。三四郎はどっちつかずの中間に出て ○与次郎はしかたなしに出てきた ○女王の前に出た心持 ○汽車は容易に出ない ○よめに行く気は出ない ○ゆうべはのみは出ませんでしたか ○勇気は出なかった（2例） ○図書館わきのあき地へ出て ○丘の上へ出た ○上へ出た ○縁側へ出て ○大久保へ出て ○大通りへ出た ○表へ出た（て）（9例） ○西洋軒の会へ出た ○学校へ出で ○何だか文句がある様だけれども、口へ出でこない ○三四郎はこれ（講義）へ出た ○外へ出（よう）て（2例） ○高田へ出たので ○東京へ出で ○通りへ出た（て）（7例） ○……のところへ出た ○静かな秋のなかへ出たら ○世の中へ出なら ○植木屋の庭へ出てしまう ○畠へ出た ○風呂場へ出でいって ○明らかなひなたへ出た ○……の方へ出で ○……前へ出た（て）（5例） ○谷中へ出で ○道灌山へ出よう ○廊下へ出た ○きれいな手が二の腕まで出た ○玄関まで出でみた ○……のところまで出た ○四つ角まで出で ○とうとう10まで出た ○月々余裕が一文も出ない ○イブセンも出なければニイチエも出ない ○別段の会話も出なかった ○学生も出でこない ○別段の答も出ない ○タウエルの外に一寸も出なかった ○……という説も出た ○15分たっても出でこない ○いくらつらまえようと思っても出でこない ○ぐうの音も出ない ○ことわる勇気も出ない ○……する勇気も出ない ○三四郎はそれで穴倉を出た ○一緒に図書館を出た ○与次郎について教室を出た ○三四郎は疳癩を起して教場を出た ○三四郎は眞實に熊本を出たような心持がした ○ぶらりと玄関を出た ○三四郎も続いて庭を出ようとすると ○傘だけ持って改札場を出た ○妹はもう病院を出たという ○部屋を出でいった

(2例) ○門を出た ○宿を出て ○三四郎は、こう云う顔立ちから出る、この時ひらめいた咄嗟の表情を生れて始めて見た ○菊人形から出る声だ。人間から出る声じゃない ○三四郎は少し酔った様な心持である。口を利き出すとつるつると出る ○つい散歩に出る気になって ○新聞に出るまではちっともご存じなかったのですか ○町を左へ切れるとすぐ野に出る ○この人の前に出ると ○あんな芸術家はめったに出るものじゃない ○白山の坂の上へ出る ○路地をぬけて表へ出ると ○あの会へ出るがいい ○翌日学校へ出ると ○三四郎が玄関へ出ると ○外へ出ると (2例) ○通りへ出ると ○裏通りへ出ると ○不案内の土地だからどこへ出るかわからない ○池の端へ出るまで ○大学の方へ出る ○正門の方へ出る ○応接間へ出るために ○年長者の前へ出るために ○のめりそうに胸が前へ出る ○四つかどへ出ると ○教場を出るとき ○庭を出るとき ○野へ出れば 【出す】 ○借りてみる気も出さない ○手も出さない ○血を出さなければ人が殺せない ○女は手を出さない ○その手を吾妻コートから出したとき ○右の手を竹の手すりから出して ○こいけむりをひげの中から出したが ○また首を窓から出した ○皿のものをつまんで出した ○荷物を一度に出した ○大きな声をのべつにして ○アポロなどを引き合いにして ○ノートを三四郎の方にして ○茶をくんで縁側へ出して ○三四郎の目の方へ出した ○……を前へ出して (3例) ○足を芝生の端まで出して ○ほかの小説でも出して ○社会へ頭を出した ○印形を出した (2例) ○顔を出した (3例) ○みかんのかごを出した ○半分体を出した ○批評家(与次郎)が口を出した (3例) ○窓から首を出した (3例) ○(大きな)声を出した (11例) ○雑誌を出して ○新聞を出した ○茶を出した ○通知を出して ○手を出して(た) (6例) ○手紙を出した ○熱を出した ○歯を出して笑った ○ハイドリオタフィアを出して読み始めた ○ハンケチを出して (2例) ○すぐ返事を出してくれれば ○白い前垂を出し ○外へ店を出し ○一枚の名刺を出して ○…… (し) たものを出し ○書きかけを三四郎の方へ出す ○野々宮さんも折々口を出すと思われる

○声を出す（2例） ○通知を出す ○風呂敷包みを出す ○竹格子の窓から鼻を出す位にして ○こんなことに口を出せば ○本当の肖像画を描いて展覧会にでも出そうと思って

「に」格の名詞と「はいる」の関係は前論「助詞『に』を含む動詞句の構造」に述べたところである。「出る」「出す」はせまいところから広いところへ、内側から外側へ、現在位置から次の位置への移動であり、「はいる」「入れる」はひろいところからせまいところへ、外から内へ、次の位置から主体の位置（近く）への移動である。「出る」のばあい「おもて」「外」その他の名詞が多く目立ち、「はいる」のばあい「なか」、「（門）内」「へや」などが目立つのはそのあらわれであろう。

(1V-39) 「往復」の動詞, 2. 1527。「行く」「くる」「やってくる」「かえる」「とんでくる」「いらっしゃる」「もちかえる」「おもむく」など。主として移動性の動詞。自動詞で主語は人が多い。そのほか、手紙・しらせ、時期・時刻などが目立つ。移動可能のものであるか、主語にとって接近、その逆と考えられるものかである。「……てくる」の形で事態の変化を表わすことがある。移動先は+loc.の名詞に「に」「へ」「まで」などがつく。

【人】△本田さんが来て △森田さんを残して従業員が帰った ○通りへ出ると、殆ど学生ばかり歩いている。それが、みな同じ方向へ行く ○佐々木さんがあなたのところへいらした ○ひとりの学生が、与次郎に、演芸会が……と教えてくれた ○三四郎が広田の家へ来るには色々な意味がある ○ところへ広田先生がロックコートで天長節の式から帰ってきた ○この男が二人の前へ来た時 ○原口が広田先生のところへ来て ○先生がはしご段の下へ来て ○この男がなかなか帰りそうもない ○相手がどこへ行くのだか ○そのうち会員が段々くる ○奇麗な女がたくさんくる ○与次郎がそばへ来て ○よし子が、そう早く来ようとは待ち設けなかった ○自分が西洋へ行って、○先生がしばらくこないといって ○ぼくが始終行けるか、むこうが終始来られるところでないと ○与次郎が三四郎の下宿へ来た ○

与次郎だけが三四郎のそばへ来た ○久しぶりに熊本での友人がくる ○母がくにへかえる ○おっかさんがくにへかえった ○翌日与次郎が来て ○学期の始まり際なので新しい高等学校の帽子を被った生徒が大分通る。野々宮君は愉快そうに、この連中を見ている。「大分新しいのが来ましたね」 ○この間お光さんのおっかさんが来て ○「佐々木が来ました」 ○下女が来て ○「それから君がきたのさ」 ○もしその女が来たらおもらいになったでしょう ○さっきポンチ絵を書いた男が来て ○きのうポンチ絵を書いた男が来て ○晩になって医者が来た ○実は母が看病に行っている ○友達が金を借りに来た ○おっ母さんが帰ると同時に ○そこへうまい具合によし子が帰ってきてくれた ○三四郎は主人が帰ったんだなとさとった ○約束通り野々宮が帰ってきた ○佐々木さんがおいでになって ○原口さんがおいでになりました ○今まで佐々木がうちへ来ていてね ○もとの先生の広田という人が妹の見舞に来てくれて ○与次郎が雨のなかを突然やってきて ○与次郎が足早にやってきた ○なぜ熊本の生徒がいまごろ東京へ行くんだか ○美弥子がいってしまうと ○妹が兄の下宿へ行くところだ ○若い方があとから行く ○きょうも与次郎があそびに来てくれればよい △酒屋や肉屋の主人がとんできて △須藤さんがもちかえった辞世のうつし △みかねたわたしが本田会長のところへ行って △米副領事の一人が19日ユエにおもむき 【準人】 ○やがて行列が来た ○こどもの葬式がきた △宇宙樂團がやってくる 【手紙など】 ○手紙が来たときだけは ○母からの電報が来ていた ○どこからか電報が来た ○野々宮から電報が来た ○葉書が来ている △……の名を連ねた年賀状がしばしばくることである △弟子入り志望のはがきがわんさと来ている ○六号活字の投書にこんなのがいくらでもくる ○お光さんに縫ってもらった綿入れが小包でくるそうだ 【時刻・時期】 ○檜に秋が来たのは珍しい ○散会の時刻が来て ○つかれていふことができない時節が来た ○永久にやめる時期がこないとも限らない △日本の大発展に参加する日がくると思えば ○三四郎はベルを聞きながら九時が来たんだろうと考えた 【質問など】 局に問い合わせが来た △共演

の話が来た時 【その他】△都会の生活が帰ってこなくてもよい ○何時になく感じが生温く來た ○ハンケチが三四郎の顔の前に來た ○風にさからって投げた折りのふたが、白く舞いもどったように見えた ○美弥子の顔と三四郎の顔が一尺ばかりの距離に來た ○三四郎の足が門前まで來たときは ○日の丸は合点がゆくが、イギリスの国旗は △エルザが野生にかえつてゆくくだりが

他の例。

○うまくいかない（3例） ○そうはいかない（4例） ○……でやるわけにもいかない ○下宿へ行くところだ ○こっちから行って ○行ってしまう ○かけこんでいった ○あなたにあいに行つたんです ○遊びにいったんじゃありません ○里見さんといっしょにいいたらよからう ○金を返しに行つたのじゃありません ○看病に行って ○学校に行って ○書斎に行った ○買わずに行つてしまう ○大連へ出かせぎに行つた ○便所に行つたんだな ○立って便所に行つた ○旅順の方へ行つて ○見に行つたって ○見舞に行ってやってください ○朝の内湯に行つた ○夕刻に行ってみると ○夕べはいいったんだ ○あすこへいいったところが ○穴倉へ行って ○美弥子の家へ行った ○大久保へ行って ○どこへ行つてしまつた（2例） ○どこかへ行つたらしく ○運動会へ行って ○美弥子は反対の側へ行つた ○学校へ行つた（ら）て（3例） ○書斎へ行って ○新橋へ行って ○西洋へ行って ○望遠鏡のそばへ行って ○台所へいつたあと ○通りへ行って ○床屋へいつた ○……のところへいって（た）（7例） ○隣りへ行つた ○どこへいつた（2例） ○どこかへ行って ○左へ行って ○病院へ行って ○暗い方へ行つた ○右へ行つたり ○向うへ行って ○梯子段の下まで行つて ○どこまで行つても ○行けるまで行つてみなかつたから ○荒井の薬師まで行つた ○どうしても俗謡で行かなくっちゃだめですよ ○こっちの自由に行かなくなるかもしれない ○とりにゆかなければ（2例） ○湯に行かないか ○……わけにゆかない（4例） ○わけにはゆかない（2例） ○よめに行かない ○けいべつするところへ

行かない ○野々宮さんところへ行かない ○学校へ行かずに ○行くとも行かないとも答えなかった ○……ているわけにもゆかず ○一遍も行かない ○いっしょに行きましょうか ○写真を見に行きます ○若い方があとから行く ○あとから行くから ○はじめから行く気はないんだから ○いそいでゆく ○ランプをさしこんで行く ○すすんで行く ○とんでゆく (2例) ○あの理由でゆくと ○いっしょにゆくほどの事件でもない ○ステーションまで送りにゆく ○学校へ教えに行く ○美弥子に返しに行く ○借りに行く ○東京に行く ○まっすぐに行くと ○見に行く (3例) ○よめに行く (3例) ○では行くかな ○どこかへ行くんですか ○学校へ行く (2例) ○こっちへ行くと ○先へ行く (2例) ○団子坂へ行く ○閲覧室へ行く ○終局へ行くと ○そこへ行くと広田先生は ○チャーチへ行くことは ○東京へ行くんだから ○……のところへ行く (9例) ○どこへ行く (3例) ○……の方へ行く (4例) ○同じ方向へ行く ○墓地へ行く ○西片町へ行く ○あそこまで行く ○そこまでゆく ○遠くまで行く ○お前も行くのか ○三時すぎに行けば ○尼寺へ行け (4例) ○あなたのところへ行け ○借りに行ける ○とりに行ける ○行けるまで行ってみる ○一緒に行こう ○てんぶらを食いに行こう ○寄宿舎へでも行こう ○淀見軒へ行こう ○だんだんうすらいで来て ○かけこんできて ○手ぶらで来た ○なんで来たか ○三人連れではいりこんで来た ○本でも読んできた ○里見恭助と来たら ○一週間ぐらいするときます ○ことによると来ているかも ○近所の医者に来てもらう ○大勢一緒に来た ○教えに来てくれた ○香水を買いに来て ○返しに来た ○借りに来た ○聞きに来た ○散歩に来て ○たのしみに来た ○手伝いに来て (2例) ○取りに来て ○日曜だのに来てくれ ○見に来て (2例) ○見舞に来て (2例) ○むかえに来て (2例) ○よめに来て ○話しへ来た ○あすこへ来て ○うちへ来て ○かどへ来た (2例) ○北へ来た ○草原へ來た ○下宿へ來た ○一番先に来て ○座敷へ来て ○の下へ来て ○正面へ来て ○願書を持って事務へ來たとき ○もとの席へ来て ○そばへ來た

(て)(6例) ○出口へ来て ○東京へ来て ○ところへ来た (て)(7例)
○日本橋へ来て ○前へ来た (て)(4例) ○西片町へ来た ○入口まで來
た ○橋の上まで來た ○縁ばなまで來た ○ある角度まできて ○ここま
で來て ○窓の下まで來て ○のそばまで來て (た)(4例) ○4丁目まで
來て ○てっぺんまで來た ○……ところまできて (た)(4例) ○前まで
來て (3例) ○廊下まで來て ○1まで來てとまつた ○五六間も來たと
きに ○こちらへも來ますか ○頭に浮かんで來る ○書きとめてくる ○
苦しんでくる ○とんでくる ○研究に來る ○礼を述べに來る ○見にく
る ○見舞に來る ○日曜にくる ○くる人 ○うちへ來る (2例) ○4
丁目の角を來る ○こっちへくる (2例) ○二三軒先へ來る ○松の下へ
來る ○四角近くへ來る ○……のところへ來る (2例) ○茶の間へ來る
○……の上まで來ると ○そばまで來ると ○前まで來ると (2例) ○そ
ばまでくれば ○遊びにこい ○この松を目じるしに來い ○学校から帰っ
て ○式から帰って ○外から帰って ○急いで帰ってくると ○与次郎は
それで帰った ○家に帰った ○図書館に帰った ○下宿に帰って (2例)
○正面に帰った ○テーブルに帰った ○やがて女は帰ってきた ○帰って
くれ ○冬休に帰って ○うちへかえって (た)(7例) ○くにへかえって
(2例) ○下宿へ帰って (9例) ○もとの腰掛へ帰って ○こっちへ帰っ
てきた ○さとへ帰って ○席へ帰って ○教室の方まで帰って ○追分ま
で帰って ○先生も帰ってきて ○にいさんといっしょに帰らないんですか
○病気が悪いので帰らない ○席へ帰らず ○いつまでまっていても帰らな
い ○用があるから帰る ○帰ると同時に ○飛んで帰る ○追分に帰る
○夏休に帰る ○われに帰る (2例) ○浮世へ帰る ○うちへ帰る (2例)
○くにへ帰る ○下宿へ帰る (2例) ○さとへ帰る ○座に帰る ○今夜
は帰れない ○一緒に帰ろう ○下宿へ帰ろう

「から」は出発点を示す。「に」の前の名詞が+loc. であるとき移動の目標地を
示し、人間行動の意味であるとき、意向を示す。

(IV-40) 「込み」の動詞, 2. 1531, 「つまる」「おさめる」「ぬける」「ぬく」など。なかにはいるものあるいはその要素で、名詞の意味特徴はとらえにくいが、具体的なものが多い。

○ゆうべのタウエルが、上のところにぎっしりつまっている ○遠くから見るとただ人がぎっしりつまっているだけで ○一時間後にはどうかこうか廊下の書物が書棚の中へつまってしまった △リール一巻で手口が四万七千人分収められている △福田氏は平和な時代がぬけているが ○かすをとらないと味がぬける ○三四郎はあとをたずねる勇気がぬけてしまった ○その男が刀を抜いて ○なんとなく間がぬけている ○だれがかいたって間がぬけてるようにはかけません ○どうしていまのようにああ間がぬけていられるだろう ○つづみの音のように間がぬけていて

他の例。

○折角握った札を又元の所へ収めて

「間がぬける」はイディオム。

(IV-41) 「しみ・漏れ・汲み・潜み」などの動詞, 2. 1532。「しみる」「もれる」、「つぐ」、「こもる」「とじこめる」「とじこもる」など。「しみる」「もれる」などは本来液体などの作用。「つぐ」も液体、のみものなど。「こもる」などはなかにはいるもの、などが主語または補語になる。他動詞の主体は人。

○三四郎が動く東京の真中にとじこめられて ○どんな肉を描いたって、靈がこもらなければ △出だしからはげしい気迫がこもっている
例が少ないが、「こもる」のばあい、精神的な用法が多いかもしねない。

他の例。

○この人とは水蜜桃以来妙な関係がある ○東窓をもれる朝日の光 ○美弥子からもれて、よし子に伝わって ○女の口をもれたかすかなためいき ○新しい茶を注いで

(IV-42) 「上がり下がり」の動詞, 2. 1540。「あがる」「はねあがる」「たちの

ぼる」「あげる」「ひきあげる」「おちる」「おとす」「さがる」「さげる」「よじのぼる」「のぼる」「墮する」「くだす」など。他動詞の主語は人間。自他が対応するものにあっては、自動詞の主語と他動詞の「を」の前が対応する。これは1.4, 1.5などの名詞で、具体性のあるものをさす名詞であることが基本であるが、動詞の用法の発展によって、ひゆ的な用法のばあいには、具体的なもの、でなく、人間活動についての名詞などもその位置にくることができる。もののはあい、上下運動が可能であるもの、であるが、人間活動に関したものでも、何らかの観点でその性質があるもの、がとりあげられて、シンタグマのなかで動詞の意味に対応する。「よじのぼる」などは主として人間、「たちのぼる」は主として煙、「墮する」は人間の精神活動に関する表現とともに用いられる。空間的な移動をあらわすとき、多くのばあい+loc. の名詞に「に」「へ」がつき、「から」がつくこともある。

○このときビールのコップが四つばかり一度に高くあがった △墜落直前に機首があがった △同機は墜落直前に機首がはねあがった △低空までおりてきたが急に機首がはねあがりそのままの直後 ○煙草の煙の方が猛烈に立ちのぼる ○名刺をたもとへ入れた三四郎が顔をあげた △副操縦席と前車輪が引きあげられた △尾翼エンジン部が引き上げられ ○上から桜の葉が時々落ちてくる ○そのほかにナイフと襟下がりがひとつ落ちている ○腰から上が、風に乗る髪のようにふわりと前に落ちた ○工事場から鉄線が落ち ○赤革の定期券入れが電車の床に落ち ○ニュートンがりんごが引力で落ちるのを発見 ○雨が落ちているように思う ○秋になって水が落ちたから浅い △同機が飛行の最後段階でエンジンの出力があがった兆候や ○高压線鉄塔に一人の青年がよじのぼり 【転義的その他】○気の毒なことにいまだに月給があがらずにいる △不況対策が逆に物価を上げる △公共料金が同時に上がらない △集荷手数料が引きあげられたため △……円にまではねあがった米価が事件後半にさがった △調停案が授業料の値上げを二万円さげる…… △各方面から中継要望の声があがっており ○話が急に実際問題に落ちる ○ただその方法が少しく細工に落ちておもしろくない ○その時

間が画家の意識にさえのぼらない ○大きな黒い目が、枕についた三四郎の顔の上に落ちている △側近政治に墮する △松下に対する人気はやや気勢が上らない △小高い丘が影を落としている △宣伝部の某副部長が批判のやりだまにあげられた ○古来文学者が文学に対しだした定義

他の例。

○湯から上がって ○自分は上へあがった ○砂だらけの縁側へあがって
○二階へ上がって ○三階へ上がって ○料理屋へ上がって ○寄席へ上がって
○美弥子も上がってきた ○二人で坂を上がって ○二階へ上がって
○人の評判はこんなところから上がり又こんなところから落ちるかと思う
○草から上の地意気で身体は冷えていた ○思い切って庭から上ることにした
○飲食店へあがれば ○三四郎は床を上げ ○三四郎は上げかけた腰をまた草の上におろした ○ひょいと頭をあげた ○顔をあげた (3例)
○首をあげて ○腰をあげない (た, て) (3例) ○祝盃をあげている (2例)
○目をあげて (3例) ○顔をあげる (2例) ○腰をあげる ○祝盃をあげる
○目をあげる (2例) ○高いところから落ちて死ぬ ○話題は端なく広田先生の上に落ちた ○秋の日は鏡の様に濁った池の上に落ちた
○計は貧者の頭に落ちた ○どっちの批評もふにおちない ○地面の上へ落ちて死ぬばかりだ ○美弥子の両手が三四郎の両腕の上へ落ちた ○細工に落ちるというが ○そばに置いた安楽椅子に落ちるようにとんと腰をおろした
○美弥子は持っていた団扇を立ちながら床の上に落とした ○美弥子は白いハンケチを袂へ落とした ○どこへ落としたんだ ○若い方が白い花を三四郎の前へ落して行った ○不思議に奥行のある画から、その奥行だけを落して、普通の画に美弥子を描き直しているのである ○銀杏が向うの方で尽きるあたりからだらだら坂に下がって ○白い方は一足土手の縁から退くさがっている ○原口さんは、この時又二歩ばかり後へ退くさがって
○飯が済むと下女は台所へ下る ○左の手を出してぶらりとさげた ○頭をさげた (て) (3例) ○かごをさげて ○ふろしき包みを下げて (2例)
○手拭を下げて ○バケツをさげた ○手に大きなバスケットをさげている

○家賃をさげる ○間違ったら下宿の勘定を廷ばして置こうなどという考え
はまだ三四郎の頭に上らない ○静かな山にのぼったり ○ほうきをもって
二階へのぼった ○石段をのぼって ○葉と葉の重なる裏まで上って来るよ
うに思われる ○爪先上りにだらだらと上ると ○二段ばかりまっすぐにの
ぼると ○よし子はさきへのぼる ○しばらく河の縁を上ると

(1V-43) 「乗り降り・浮き沈み」などの動詞, 2. 1541。「のる」「のせる」「お
りる」「おろす」「浮く」「沈む」など。「のる」「のせる」「おりる」「おろす」な
どは、「車」など何かのもの「に」あるいは「から」(「から」のばあいは別の「に」
が用いられることがある)上下する動作であって, 具体的で動きうるものが「が」
または「を」の前にくるが, ひゆ的な用法ではそのような「動き」のあるもの
がある特定の固定した感じをもつものの上にのったりするという意味に用いられ
る。「浮く」「沈む」はもとは「水」のような液体などなかでの(位置または)
動きを示すものであり, したがって「水面に」「水中に」などの「に」が用いられ
るが, 気体とか, 他の現象に用いられるものであろう。他動詞の主語はまず
人である。「おりる」には「車を」などがつく用法がある

【具体物】 ○湯からあがって, 二人が枝の間のすえである機械の上に乗って
○母の手で書いた封筒がちゃんと机の上にのっている ○遠くから見ても色
つやのいい男が乗っている ○マッチと灰皿がのっている ○非常に多くの
人間がのったりするので ○ふとい針金だらけの機械がのっかって ○上か
ら桜の葉が時々落ちてくる。その一つがバスケットの蓋の上に乗った ○な
んとかいう人が, 学生の時分に馬に乗って △テストパイロット・ウォー
カー氏が乗っていたが ○茶碗むしといっしょに手紙が一本のせてある ○
そばやのかつぎがどんが鳴るとせいろや種物を山のように肩へのせて ○車
屋が荷物を卸し始めた ○複雑な機械がのせてある ○白い薄雲がはけさき
でかきはらったあとのようにすじかいに長く浮いている 【固定表現】 ○幕
がまたおりた ○そこで幕がおりた ○錠がおりている(2例) △タンカー
が浅瀬に乗りあげ 【拡大用法】 ○そのはやしの音が下の方から次第に浮き

上って ○力が余って腰が浮いた △霧につつまれた金門橋が落日のあわい
光の中にぼんやりと浮かび △それがテレビに乗って茶の間にはいり ○経
済が安定成長に乗り ○それでいて気が乗らない ○一向に気が乗らない
○次第につりこまれるように気が乗ってきて ○明るい表の空気のなかに
は、初秋の緑が浮いているばかりである ○あとは散漫に美弥子のことが頭
に浮かんでくる

他の例。

○たしかに前の駅から乗った田舎者である ○御茶の水で電車をおりてすぐ
併に乗った ○電車に乗って(2例) ○猪牙船に乗った心持 ○汽車へ乗って
(2例) ○電車へ乗って ○三等へ乗っている ○新聞には別に見る程
のこと載っていない ○風に乗る紙 ○電車に乗る(2例) ○汽車にも
のれない ○病院の寝台の上に乗せて ○美弥子は右の足を泥濘の真中にあ
る石の上へ乗せた ○手の平へのせてみると ○電車に乗って、……日本橋
へ来て、そこで下りて ○簫とハタキを持って美弥子は静かに降りて来た
○隙を見て、又理科大学の穴倉へ降りて行った ○女は何時の間にか和土(た
たき)の上へ下りた ○くつぬぎへおりて(おりようとして) ○たたきの
廊下を下におりた ○動坂から田端の谷へ下りたが ○二三歩芝の上を裾の
方へ下りた ○野々宮さんは廊下へ下りて ○三四郎はどうとう女の前まで
下りて来た ○石段を降りて ○早足に一人岡を下りていった ○階段を降
りてきた ○坂を下りてくる ○大久保のステーションを降りて ○無言の
まま階子段を降りて ○はしご段を降りて ○舞台を下りて ○一箱を年に
一度ずつ石から卸して蜂の為に蜜を切りとる ○三四郎はあげかけた腰をま
た草の上に卸した ○腰をおろして(た)(おろす)(10例) ○別にこれと
いう思案も浮かばない ○その時の模様を思い出そうとしてもぼうとしてと
ても明瞭に浮かんでこない

(IV-44) 「合い・組み・解け」などの動詞, 2. 1550, 「組み合わせ・まとめ」
などの動詞 2. 1551。「組みあわせる」「入りみだれる」「ほぐれる」「まとまる」

「まとめる」「あわせる」「からむ」など。「AとBをくみあわせる」「AとBとが入り乱れる」「Aがほぐれる」「Aがまとまる」「Aをまとめる」「AとBをまとめる」「AをBにあわせる」「AがBにからむ」「AとBがからむ」などの Valenz がある。

○落ちこむ者が、はいあがるものと入り乱れて △多くの若い作家が、なんらかの方法で実態と虚構とを組みあわせ △自然に気分がほぐれ ○事がまとまらなくなる ○美弥子が与次郎に調子を合わせた △核軍縮という複雑な要素がからむ △昨年度の交換実績がまとまった

他の例。

○野々宮君の妹と、妹の病氣と大学の病院を一所にまとめて、それに池の周囲で逢った女を加えて ○大著述にでもまとめられれば

(1V-45) 「散り・分かれ」などの動詞、2. 1552。「散る」「散らす」「ふきちらす」「分かれる」「分ける」など。本来他動詞の主格は人であるが、ここに集めた例では、文学的表現あるいは翻訳的な表現で、そうでないものがある。他動詞の「を」の前と自動詞の「が」の前とは対応する。この名詞にはあまり特徴がないが、いくつかの要素からなっていて（人間ならば二人以上の集合）、それが分散するという動詞の意味に対応する。

○若い男が皆くらい夜の中に散った ○風がはげしいとみえて、雲のはしがふき散らされると △黒人と白人にわかれ

他の例。

○自分もいっそのこと気を散らさずに ○寂寞の瞿粟〈けし〉を散らすやしきりなり ○料理屋の前で野々宮君に別れて ○三四郎は赤門の所で二人に別れた ○三四郎はよし子に別れた ○三四郎も女連に別れて下宿へ戻ろうと思ったが ○ひげの男は別れるときまで名前をあかさなかった
「わかれ」は人が主語のとき、「人に」「人と」をうけ、また一般に「……と……（と）に」の形をうける。後者は「分ける」のときも受ける。

(1V-46) 「開閉」の動詞, 2. 1553。「あく」「あける」「あけはなす」「しまる」「しめる」「ひらく」「たてる」など。他動詞の主語は人間が主。他動詞の「を」の前と、対応する自動詞の「が」の前は対応する。この名詞は、戸、障子、まどなど「開閉可能」な加工物(1.4)を生として、その他の袋などや先がばらばらになって聞く性質のあるものがふつうである。「らちがあく」のような慣用表現、「会議、会合」などを聞く、などの拡大された用法もある。

【戸、障子、まどなど】○書斎の戸をあけて ○人品のいいお爺さんの西洋人が戸をあけてはいってきて ○下女が閉てたと思った戸が開いている ○忽然としてチャーチの戸が開いた ○戸が開いている ○その戸があけはなしてある ○ところへ下女が障子をあけて ○二階の障子ががらりとあいた ○机の前の窓がまだ閉てずにあった ○家の門をはいると左手が庭で木戸をあけて ○庭木戸がすうとあいた ○庭の木戸がぎいとあいて ○そのうち幕があいて △リーグ戦の幕が開かれた △録音テープをかけたふたがしまると 【その他のもの】△女がハンドバッグをあけ ○そのハンケチの指にあまたったところが、さらりと開いている ○眼の大きな、鼻の細い、唇の薄い、鉢が開いたと思う位に、額が広くって頬〈あご〉が削〈こ〉けた女であった ○折襟に、幅の広い黒縫子を結んだ先がぱっと開いて胸一杯になっている。与次郎が仏蘭西の画工は、みんなああ云う襟飾を着けるものだと教えてくれた 【慣用表現】○その前に美弥子が口を開いた ○しかし疑うばかりで一向埒が明かない ○蚊帳が狭いとか云って埒が明かない 【会合、式典など】△入学式が開かれた △かつて議会が開かれた大広間の △三国主脳会談が開かれて △外相会議の予備会談が開かれる △連合会の指導層たちが秘密会を開いている

他の例。

○三四郎はこの缶の横腹に開いている二つの穴に眼をうけた ○穴をあけて ○雨戸をあけて ○かばんをあけて ○当人も一寸太陽を開けてみた ○雨戸だけをあけて ○戸をあけて ○机の引き出しをあけた ○窓をあけた ○目をあけた ○梅雨はもうあけたんだろうか ○昔は雷さえ鳴れば梅雨は

明けるに極まっていたが ○どうしてどうして雷位じゃ明ける事じゃない
○裏の窓もあける ○障子をあけると月夜だ ○バケツを暗い縁側へ置いて
戸を開ける ○夜があければ ○木戸をあければ ○門をあけさせてもいい
が ○その戸があけはなしてある ○門はしまっている ○肉は頬と云わず
頬と云わざきちりと締っている ○口をひらいた(て)(3例) ○ふすまを
ひらいて ○二三ページを開いて(2例) ○口をひらかない ○大学相当
の講義を開かなくっては ○演芸会は比較的寒い時に開かれた ○運動会は
各自〈めいめい〉勝手に開くべきものである ○松を座敷へ入れたまんま雨
戸を閉て鏡を御してしまう ○檜に秋が来たのは珍しいと思いながら、雨
戸を閉てた ○よし子は障子を閉てて、枕元へ坐った
「あける」の用法には、他の例では「穴」「雑誌」「引き出し」「目」「つゆ」などが出ている。

(1V-47)「結び・重ね・積み」など、2. 1554 の動詞。「つながる」「つなぐ」「結ぶ」「むすびつける」；「重なる」「かさねる」「積む」「つもる」など。「つながる」「つなぐ」は「AをBにつなぐ」「AがBにつながる」あるいは「手をつなぐ」のような表現で、「結びつける」は「AをBにむすびつける」の形で、用いられる。「重なる」「つむ」は重ねて上におくことができるようなもの、他の上にさらにおくことができるようなものであって具体的なものが主であるが、抽象的なものに拡大して表現することが可能である。

△皮膚の色の異なる三つの人種が手をつないで △男が手をしばろうとナイフを下においたとき △サーナン少佐が75メートルの命綱でジェミニのカプセルに結びつけ △胴体の底が左右両翼につながって ○石が積んである ○ほこりが二寸もつもっていて ○車力のおろした書物がいっぱい積んである △神経疲労や症状がいくつも重なったがんこなつかれ ○こう遣って毎日描いていると毎日の量が積り積って、しばらくする内に、描いている画に一定の気分が出来てくる

他の例。

○ひもをむすびながら (むすんだ) (2例) ○はばの広い黒じゅすをむすんだ ○両手を前で重ねて ○しゃつを重ねて ○じゅばんを重ねて ○それからすべての上につもったちりがある

「つむ」は四角い形のもの、「重ねる」「重なる」は平たい感じのものにつかうので、その前の名詞にもおのずから相違が生ずる

(1V-48) 「集会」の動詞, 2.1555。「あつまる」「あつめる」「集中する」「たかる」「たむろする」「もちよる」など。「あつまる」の主語は人が多いが、「集める」の目的語に対応して物品その他のばあいであることもある。「集中する」は抽象的なものが主語になりうる。「たかる」は人, ありなど+animate。「たむろする」は主として人。他動詞の主語は人である。場所などを意味する名詞に「に」がつく。

【人】△こんなタイプの海外移住者が四百人も集まって ○そのうちの二三軒には人が黒山のようにたかっている ○交番の前へ人が黒山のようにたかっている ○コートや何か着たえそうな男が沢山集まって ○人が沢山たかっている △約六千五百人が集まり △盛り場に若い女性が集まる時間に合わせ ○開会の当日から人がいっぱいいたかった △男女の黒人たち八人がたむろしている ○一目に分るように泥棒がかたまっている 【その他】△……作品を含めた百四十点が集まり △だからこそわれわれが映画を一堂に集めようとして △どういう形で開くかということに論議が集中して △各企業がすぐれたアイディアをもちよって △同將軍が仏教徒の信頼を集めて他の例。

○三四郎の注意の焦点は、今、原口さんの話の上にもない、原口さんの画の上にもない、無論向うに立っている美弥子に集まっている ○ヘーゲルの講義を聞かんとして、四方より伯林に集まる学生は ○学校へ行ったら「偉大なる暗闇」の作者として、衆人の注意を一身に集めている氣色がした ○三人は首を鳩めて画帳を一枚毎に繰っていた ○白く柔らかな針を集めた様に ○先生もまあ、こんなにいりもしない本を集めてどうする気かなあ

(1V-49) 「出会い・伴ない」などの動詞, 2. 1556。「であう」「あう」「つれだつ」「ともなう」「おちあう」。主語は主として人。「あう」のばあいは「……が(だれ)にあう」の形。「あう」は「二人」などが主のときはそうではないが、「人」が主のときは「人に」のタイプになる。場所は「で」で示す(「あう」「であう」)。その他「人が人とつれだつ」「人と人がつれだつ」「人が人をともなう」「人が人とおちあう」の形。

○もう少しで双方がぴたりとであって ○偶然美弥子とよし子がつれだつて香水を買いに来た ○羽織を着た男がたった二人ついている ○妙なお客が落ち合ったな。入口で逢ったのか 【人以外】谷中と千駄木が谷でであうと ○時々は女と自分の目が行きあたることもあった

他の例。

○よし子と一緒に野々宮の下宿で落ち合わねばならぬ機会をいさか迷惑に感じた ○戦争以降こんな人間に出来うとは思いもよらなかつた ○君そんな人に出逢つたですか ○しばらくすると一人の迷子に出逢つた ○その時色彩の感じは悉く消えて何ともいえぬ或物に出逢つた ○ばったり与次郎に出逢つた ○二人は連れ立つて門を出た ○自分の腹を見ぬかれたという自覚に伴う一種の屈辱をかすかに感じた ○現代人は事実は好むが、事実に伴う情操は切棄てる習慣である

「であう」「つれだつ」「おちあう」などは人間行動が主であるが、現代語では「ともなう」は一般的、あるいは抽象的な現象の表現にも多く用いられる。

(1V-50) 「接触・接近」の動詞, 2. 1560。「つく」「つける」「ひきつける」「ふれる」「さわる」「ふれあう」「接触する」; 「寄る」「寄せる」「近づく」「近寄る」。他動詞の主語は人。自他対応のあるとき、自動詞の「が」の前は他動詞の「を」の前に対応する。この名詞は、人間、物体、など形のあるものが多いが、抽象的な概念のこともある。「気がつく」「判定がつく」のような特定の表現のほか、「電灯がつく」のような表現もある。接触・接近のおこるところに「に」「へ」がついて補語になる。

【接触】○もう少しで美弥子の手に自分の手が触れるところで ○杉垣に羽織の肩が触る程に ○手が着物にさわると ○三四郎の舌が上あごにひつついてしまった ○防衛庁職員が通行章をつけていない ○鉛筆で丁寧にしるしがつけてあった ○悪魔の翼がわたしの足にさわり ○あの彗星の尾が太陽の方へ引きつけられべき筈であるのに 【付加】○膳の上を見ると主人のことばに違わずかのひめいちがついている ○成程貸屋札が付いている ○窓には竹の格子がついている △型紙が5まいもついて 【人間行為とその所産】○どれもこれもみんな悪い意味がつけられる ○割注みたようなものがついている △むずかしい注文がついていた ○本当によく気を付けなくてはいけないという訓戒が付いている ○そのあとへ但し書きがつけてある△二つの心がふれあった瞬間から ○自分がもし現実世界と接触しているならば ○自分が今日までの生活は現実世界に毫も接触していない事になる ○呼んで景気がつきさえすればいい 【接近】○「どら拌見」と美弥子が顔を寄せてくる ○その音が次第に近付いて ○眸と瞼の距離が次第に近付くように見え 【ひゆ】△人がらがぐっとむねにせまって 【人】警官がそっと近寄って ○そういうえらい人たちがみんな寄ってくるのかな ○われわれが今夜ここへ寄って懇親のために一夕の歓をつくすのは 【気がつく】△気がついた飯島さんも ○気がつけばこんなところに ○その金が巡り巡ってヴァイオリンに変形したものとは兄妹とも気がつかないから ○誰も気がつかない, 平氣でいる ○まるで気がつかなかつた ○そんなことに一向気がつかないらしい ○あのときは気がつかなかつたが ○なにがあるかはほとんど気がつかなかつた ○思想界の活動には毫も気がつかなかつた ○女は気がついたとみえて ○同じであることに気がついたり ○偶然ながら気がついたら ○始めて気がついたように ○三四郎も気がついている ○三四郎は飛んだ事をしたのかと気がついて ○これが元禄かと三四郎も気がついた ○そこに気がついたときには ○ふと気がついたら ○ようやく気がついた ○それに気がついた与次郎は ○君気がついていますか ○気がついてみると ○よくここに気がついたものだ ○これでしまいたなと気がつい

た ○広田さんもようやく気がついた ○はじめはどうして気がついたものでしょな ○ようやく気がついてそろそろ帰る仕度を ○気がついてふと美弥子を見た ○田舎者らしいのに気がついて ○桜の枯葉でもはこうかしらんと漸く気がついたとき ○三四郎は気がついて今まで美弥子の ○実は始めて気がついた ○始めはどうして気がついたものでしょな ○急に気がついた ○この時始めて気がついてみると ○はじめて気がついたようにいった ○三四郎が気がついてみると 【その他のつく】 ○漸くのことでかたがついたとみえて ○どうなるんだか見当がつかない ○行ってみなかつたら見当がつかない ○そのうちのどっちだか見当がつかない ○とんと見当がつかなかつた ○どうにも見当がつかないから ○為にするところがあつて起稿したものだと判定がつく ○電燈がつくには早すぎる ○ぱつと電燈がつくところ ○部屋の中には電灯がついている ○盛んに電灯がついている

他の例。

○枕についた三四郎の顔 ○門も入口も全くあとからつけたものらしい ○赤い壁につけて ○前句の解釈のためにつけた ○席へつけ ○頭をまくらへつけた ○あとをつけ (2例) ○屋根に影をつけた ○額縁をつけない下絵 ○気をつけて (ないと) (5例) ○胸に掛員の徽章をつけて ○くぎりをつけて (2例) ○景気をつけて (た) (3例) ○おしろいをつけて ○提灯をつけて ○手をつける ○名をつける (2例) ○日記をつける ○ねらいをつける ○西洋人の鼻をつけている ○パイプを点けた ○火をつけて ○金の縁をつけて ○道をつけた ○目をつけて ○えりかざりをつける ○金の価値をつける ○しまつをつける (2例) ○しるしをつける ○りくつをつける ○三四郎には、この二人の美弥子の間に、時計の音に触れない、静かな長い時間が含まれている様に思われた ○より多く人生の根本義に触れた社会の原動力である ○まだ人工的の空気にふれていなかつた ○新しい空気に触れた男 ○目にふれるたびに ○底の方から手に障った奴を何でも構わず引出すと ○その縞が貫ぬきながら波を打つて互に

寄ったりはなれたり ○帰りに岡野へ寄って ○椅子に掛けた羽織を取って着ながら此方〈こちら〉へ寄って来た ○また棚のそばへ寄ってゆく ○そばへ寄ってきて ○村のお宮へ寄って ○三四郎は目をランプのそばへ寄せた ○三四郎は女の耳へ口を寄せた ○ひたいに少ししづをよせて ○八の字をよせて (3例) ○チャーチの垣に身をよせた

(IV-51) 「隔離」の動詞, 2. 1561, 「はなれる」「はなす」「遠のく」。他動詞の主語は人。自他対応のあるものは、「が」と「を」の前が対応。この名詞は人、物体、など。「はなれる」は場所などに「を」のついた語もとる。出発格は「から」、方向、目標地は「に」。動詞の意味は移動。

○一人が棺子をはなれて ○今までそばにいたものが、一丁ばかり遠のいたような気がする

他の例。

○電車さえ通さないと云う大学は余程社会と離れている ○二段ばかり真直に上ると、左手に離れた二間である ○なかには離れながら互に挨拶をかわす ○椅子をはなれてすわった ○ちょっと絵をはなれて ○三四郎の腰は縁側をはなれた ○女は折戸を離れた ○やがて黒板をはなれて ○棚をはなれて芝生の中へひきとった ○小さんの遣る太鼓持は、小さんを離れた太鼓持だから面白い ○全く事実をはなれたつくり話し ○彼等の声は尋常をはなれている ○室内の空気は依然として俗をはなれているので ○その日から四日程床を離れなかった ○三四郎はその時急になつかしい気がした。けれどもそのなつかしさは美弥子を離れている。野々宮を離れている ○することなすこと一つとして他をはなれたことはなかった ○机の前をはなれながら ○目だけはついに美弥子を離れなかった ○門をはなれて二三間くると ○そばをはなれるのが大いにありがたかった ○枕をはなれると ○足音はむこうへ遠のいてゆく ○いつのまにか故郷を遠のくようなあわれな感じを ○広い通りの方へとおざかったところ ○女も遠ざかったきり近づいてこない ○世外の功名心の為めに、流俗の嗜慾〈しよく〉を遠ざけてい

るかの様に思われる

(1V-52) 「寄りあい・並び」の動詞, 2. 1562。「並ぶ」「ならべる」「よる」「そう」など。主語は人, 物など。「よる」「そう」は人が多いであろう。「ならぶ」は場所+「に」, 人+「と」, 「よる」は「いす」など「に」, 「そう」は「人」あるいは長いもの+「に」。

○二人がおもてで並んだとき ○与次郎と昨夕の会で演説をした学生が並んできた ○棚に櫛だのはなかんざしだのが並べてある ○女の後ろには前の方うそく立てがマントルピールの左右に並んで △十人ほどの特別補佐官がずらりと並んでいた △商店, 公園, 学校などが整然と立ち並ぶニュータウン △禁止事項」を告げる看板が並んでいる △名曲が並んで

他の例。

○腰掛に倚ってみんなを待ち合わせていた ○肩をならべて (2例) ○この三つの世界を並べて ○ごちそうをならべる ○室の内の書棚へ並べる ○門のわきで並んだとき ○与次郎と並んで ○茶の間の向うがお勝手, 下女部屋と順に並んでいる ○焦げたものが十ばかり皿の中に並んでいる ○自分の世界と現実の世界は一つ平面に並んでおりながら ○三四郎は並んであるきながら

(1V-53) 「打ち・当たり」などの動詞, 2. 1563。「あたる」「あてる」「うつ」「たたく」「はたく」など。「あたる」は光, 風その他が主語。あたるところに「に」「へ」がつく。「うつ」以下は人が主語で, たたかれるものは主として物体であるが, ひゆ的な用法もある。

【あたる】 ○光線が顔へあたる具合いがうまい ○それほど表には濃い日が当っている ○風が強く当たって 【「うつ」のうち物体】 ○それよりか鼓を打ってみたくてね ○三四郎が畳を敲く間に美弥子が障子をはたく △副大統領が予算の方はまかせてくれといつて胸をたたく 【どうき】 ○座敷へ戻ったら動悸が打ち出した 【他の「打つ】 ○教授が鉄砲をうちそくなつた △

軍が先手をうった動き ○与次郎がはげしく手をたたく △従来の陥没説に
強い疑問符が打たれることになった ○大工の家族が山でばくちをうつ
【「うち出す」】 ○表にもようが打ち出してあったり

他の例。

○碁を打つじゃなし ○波を打って ○寝返りをうった（3例） ○光を直角にあてる ○障子にあたる日 ○風が吹く。北へ向き直るとまともに顔へ当る ○なるべく風に当たらないようにしろ ○うしろからちょいと肩をたたいたものがある ○三四郎の肩をたたいた ○与次郎の背中をたたいた
○つめでてつびんをたたいてみた ○胸をたたいて
用具の「で」が用いられている。

（IV-54）「押し・突き・引き・すれ」などの動詞, 2. 1564。「おす」「ひく」など。主語は主として人。おされたり, ひかれたりするものは, 物体, 戸, スイッチなど。方向, 位置を「に」「へ」で示す。

△柱にあるスイッチを駅員が押すと, 発煙筒がもえ ○この円盤が光に押されて動く △芸術と誤楽の間にだれが明確な一線を引きうるだろうか ○女の手から長い赤い糸がすじをひいている ○体操の教師が竹橋内へ引っぱつていって

他の例。

○扉をうんと押したが ○後から先生を押すようにして ○念を押す（2例）
○ベルをおす ○興味を引く ○目をひく ○ひとの注意と同情をひきつつ
○ふとい棒をひいて絵の具箱の蓋をばたりとしめた ○かぜをひいて ○麹町からあれを千駄木まで引いてくるのに手間が五円かかった ○首を少し後ろに引いて ○顔をあとへひいた

（IV-55）「防ぎ・ふさぎ」などの動詞, 2. 1565。「はばむ」「ふせぐ」「さえぎる」「ふさがる」「つかえる」「張る」など。他動詞の主語は主として人。

△これまでの軍縮討議がNATO加盟諸国によって前進をはばまれており ○

右側の二階だけが左側の高い小屋の前を半分さえぎっている ○地方公共団体などが、自衛隊の航空機の音響で著しいものを防止し ○マンホールのふたの空気あながどろでふさがって ○幕がはってあって通れない

他の例。

○雨をふせぐ ○光線は厚いまどかけにさえぎられて ○二人の応答を途中でさえぎられることをおそれて ○落ちこむものが這い上るものと入り乱れて、路一杯にふさがっている

「ふさがる」のは「道」や「穴」など。「人」や「どろ」で一杯になる。「ふせぐ」は「風」「雨」「敵」など。

(1V-56) 「変形」の動詞, 2. 1570。「折れる」「まがる」「ひねる」「よじれる」「たたむ」「しまる」など。自動詞の「が」の前は主として物体。「折れる」「まがる」「ひねる」「よじれる」は長いもの。「たたむ」は洋服など平たいもの。「折れる」「まがる」は車などの進路についてもい。「折る」「まげる」「よじる」「しめる」など対応する他動詞の主格は人。

△操縦桿にもぎりの部分が折れているだけで ○電車がぐるっとまわって ○原口さんが突然首をひねって △寝ている間にシーツがよじれるのは ○美弥子だけが広田先生のかげで、先生がさっきぬぎすてた洋服をたたみはじめた ○体全体が縮まってくる

他の例。動作の方向は「に」「へ」であらわす。

○細い路地に折れた ○左へ折れ(る)(5例) ○切通しの方へ折れ ○右へ折れ ○廊下の方へ折れる ○すぐ横へ折れる ○上から見ると坂はまがっている ○とんだところへまがって ○又左へ曲がって ○片町の方へまがって ○同じ方角へまがった ○細い横町へまがって ○そのかどをまがって ○静かな横町をまがって ○四角をまがって ○追分へまがる ○曙町へまがる ○左へまがる ○坂をまがる ○首をよこにまげる ○首をまげる ○のこりの新聞をたたみ直して

(1V-57) 「破壊・切断」などの動詞, 2. 1571。「こわす」「こわれる」「くずす」「くずれる」「切る」「切れる」「きずつく」など。他動詞の主語は人。自他対応のばあい、「が」と「を」の前が対応する。この名詞は物体、たてもの、(「切る」は「線」など長いもの), 人など。「切れる」は長いものがとぎれるときにも使う。

○額縁を付けない下画という様なものは、重ねて巻いた端が巻き崩れて、小口をしだらなく露わした △たてものの奥行一メートルがこわされて ○古い倉が半分とりくずされて △計器の配線がずたずたに切られ ○まねるという自覚がすでに実行の勇気をくじいたうえに ○二人の話が切れたとき ○ことばが少しの間切れた ○長い廊下のはずれが四角に切れて △折角の配慮が造形の成長感をそいで △源氏のさむらいが平家の追手に切り倒されて △警官と民間人一人が負傷した △米国人三人が負傷した △二人がけがをした △かじを切った (転義的)

他の例。

○姿勢をくずす (3例) ○その十円をくずしてしまった ○話を切る ○封を切る (2例)

(1V-58) 「増減」の動詞, 2. 1580。「ふえる」「増す」「くわわる」「たまる」「あまる」「へる」など。自動詞が多いが、他動詞の主語は主として人。自動詞の「が」の前は、人、事件、数量、物品の(数量)など、増減可能なもの。人などでも人の数など。

【人】 △ファンがぐっとふえた △体暇旅行にくる人々が年々ふえるので △毎年春先になるとあきすがふえる △ファンがふえ安上りが魅力 △若い世代が加わった △学生が大学運営に参加する △浪人がふえるから △北からの武装人員が急速に数を増し ○この方法を用いるものが近来大分ふえてきたようだ ○日本じゃいま女が余っているんだから △襲撃とテロが増大した △物件費がふえないとしても △人件費がふえて困っている ○僕に金が余っているとする △実質利益が二十億円の減となり △交通量が急

カーブでふえつつある △各部門の販売数量がふえるわけではなく △重油よりも原油が増加しそうである ○広い戸外の肌寒が漸く増してくるので ○力があまって腰が浮いた ○すると蜂がだんだんふえてくる ○反故がたまるばかりだ ○水がびたびたにたまっている ○縁に砂がいっぱいたまっている ○はらがへって (慣用表現)

他の例。

○五六人はやがて十二三人にふえた ○この二三年来むやみにふえたのでね ○予期から生ずる敬畏の念を増した ○自分を研究すればする程、自分を可愛がる度はへるのだから ○三四郎は四十時間の講義を殆ど半分にへらしてしまった ○又足りなくなる。三つにする。という風にふやして行った結果 増減の数量は数値などで(他動詞のとき「を」)示され、増減の結果の数値は「に」で示す。

(IV-59) 「伸縮」の動詞, 2. 1581。「のびる」「ちぢむ」「のばす」「のべる」「ちぢめる」など。他動詞の主語は人。自他対応の名詞が対応。具体的な物体、物品が主。長くのばしたりちぢめたりすることができ、もともと少し長いもの。
○女ののどが正面から長くのびた ○そこへ下女が床を延べにくる ○ほしいものの方へむやみに鼻がのびていったら

他の例。

細長く南北にのびた床 ○手をのばす (2例) ○背をのばす ○首を (婦人席の方へ) のばす (3例) ○頭と背中を一直線に前へのばしておじぎをした ○池の表に枝をのばした古木 ○下宿の勘定 (払い) をのばして (2例)

(IV-60) 「広げ・深め・早め・うすめ」などの動詞, 2. 1582。「たかまる」「ふかまる」「ひろまる」「かさむ」「うすくなる」など、およびその対応他動詞。関係名詞は自然物などを基本として転義的に人間生活、精神生活面の用語が用いられる。

△気温が高くなる △売り物がかさみ △日ソ両国がここに、三年来急速に
関係を深めてきた △有効需要と供給能力が均衡を保ちながら拡大 △調べ
ているうち次第に考えがふくらんでくる ○さびしさが一面にひろがって
△まじりけなしのウールの格調があなたの若さを美しく高め ○情愛がうす
くなる △戦争が拡大する

(IV-61) 「強め・衰え」など、2. 1583 の動詞。「強まる」「こうじる」「よわる」「
にぶる」「にぶくなる」など。生物体、活動力を基本として精神活動の名詞に
及ぶ。

△胃腸の働きがにぶる △心臓の筋力が弱る ○神経がにぶくなつて ○交
通その他の活動がにぶくなる ○不便がだんだんこうじて △のびなやみの
感じがつよまる △本会議で成立する見通しがつよまる

(IV-62) 「時間・時刻」の動詞、2.16。「たつ」「すぎる」「あける」「くれる」「
かかる」「おくれる」など。自動詞が主。この点ではこの類は自然現象的である。
主語は時間・時刻。「すごす」のようなばあい、主体は人で、「時間をすご
す」ことになる。「おくれる」などの主語は「汽車」「日程」など時間が少し関
係している。

○咄嗟の機がすぎて頭がひややかになったとき ○あまり時間がたつて
るので ○夜があければ常の人である ○問答をしているうちに日がくれた
△……までには時間がかかる △まだ時間がかかりそうです △一般民需
の回復には時間がかかりそうです △審判に時間がかかり ○時間がかかっ
てしかたがない △日程がおくれた理由 △上り 11 本が最高 1 時間 16 分お
くれた △上下 28 本が最高 21 分おくれた △参院での審議がおくれた ○
九時半につくべき汽車が 40 分ほどおくれた

「学校におくれる」は本来「学校の始業時間に」の意であろう。他の例。

○時期はすでにすぎていた

(1V-63) 「位置・方向」の動詞, 2. 17。「むく」「むかう」「むける」「ふりかえる」「ふりむく」「かたよる」「それる」「うつぶせる」など。主語は人が多い。「かたよる」「それる」などは他のもの。「むく」の「を」の前は方向をあらわす名詞がくる。「に」のこともある。「むかう」も「北に向かって」などいいうるが、例では人が多い。「ふりむく」は「うしろ」。

○女の一人がこっちをむいてくれた ○原口さんがこっちを向いて立っている ○この男が何かの拍子にどうかしてこっちをむいてくれればいいと △高気圧の経過が北にかたよりやすく ○すると女がふりかえった ○広田先生が急にふりむいて三四郎にきいた ○一日めに与次郎が三四郎に向かって ○その一人が一人に向かって ○帰り道に与次郎が三四郎に向かって ○友人が細君に向かって ○ハムレットがオフェリヤに向かって ○話がそれで △若い男がうつぶせになって

他の例。

○女も壁をむいたまま ○原口さんだけは絵にむいでいる ○はじめて正面に向いて ○女はこの夕日に向いて立っていた ○……の方へ向いて △やはり壁をむいて ○こっちをむいて(8例) ○下をむいて(2例) ○……の方をむいた(く)(10例) ○むこうをむいて(2例) ○横をむいて(4例) ○絵にむかいさえすれば ○顔を絵にむけた ○背中を三四郎にむけている ○眼を静かに三四郎の方にむけた ○こっちへ向けて ○……の方へ向けて(6例) ○体をよこへむけて ○追分の方へ足をむけた ○くつのかかとをむけなおす ○背をむけて ○丸い背中をむけて ○顔をぐるりとむけなおして ○美弥子は急にふりかえった ○まがろうとするととたんにふりかえった ○二人ともうしろをふりかえった ○美弥子をふりかえてみた ○女は急に三四郎の方をふりむく

(1V-64) 「形」の動詞, 2. 18。「へこむ」「まるまる」「まるめる」など。物体が主語。

○土がへこんで水がびたびたになる ○白紙を丸めて足の下へなげた。

(1V-65) 「過不足・優劣」などの動詞, 2. 19。「たりる」「値する」「まさる」「すぐれる」「上まわる」「下まわる」など。主語になる名詞は数量、品質に関するものか、そうでないものでもその性質が付与されている。「たりる」「値する」「まさる」は「に」、「まさる」「すぐれる」は「より」、「下まわる」「上まわる」は「を」。他の補語をとり、「過不足・優劣」の基準、比較点を示す。「まさる」「すぐれる」では品詞を表わす名詞に「では」がつき、比較される名詞による主語が「……の方が」の形になることがある。

△がん対策費が三十億円の要求に対しちょっぴり上まわっただけ △車棚関係が予定より下まわったこと △着陸の装置ではサーベアの方がまさっている ○箱がひとつでは足りなくなる △「なにが足りないのか」林美智子
△楽しい夢がもう一つたりなかった ○人の記念に対しては、永劫に値する
と否とを問う事なし

他の例。

○一尺に足らない古板 ○語るに足りない ○四角な庭は十坪に足りない
○この静かさの夜に勝る境に

2. 全体の見渡しと問題点

ここで前節で述べた内容を見渡してその問題点をまとめ、さらにこのしごとが次のどんな研究につながるかについて簡単に述べてみたい。

ここでは、動詞の用法を特にその Valenz について着目しつつ分析した。その Valenz は「が」「を」格を中心に「に」格を添え、これらをオブリガトリーとして他の格「へ」「と」「で」「より」「から」までについても用例に現われたものを中心として取り扱った。方法的にも模索の段階にあり、用例の数も少ないので、この報告は中間報告である。

Valenz を明らかにすると同時に、そこに現われる名詞の語類を明らかにすることにも力を注いだ。あとで述べるように、そのことがこの方法を用いて文の構造を明らかにするばあいにアンビギュイティを除くことができるカギであ

り、文の内容を論理式に改めるばあいにも有用であると考えられるからである。この観点からみると、多くのものにワードクラスの制限があるが、なかにはそのような制限がないことがむしろその特質と考えられるものがある。たとえば「似る」などの類であって、これらは「AがBに似る」という表現のとき、「A」と「似る」、「B」と「似る」の語類上の関係よりも、「A」と「B」の相対的な関係が問題になるというべきである。このようにワードクラスの制限が、直接動詞との関係においてでなく、動詞によって関係づけられる二事項間のものであることがある。

しかしそれはそう多くはなくて、多くは直接動詞との関係においてあるものである。そして、一般的にいって、語類上のかたよりは、かなりいちじるしいものがある。たとえば、「かざす」という語の用例は多くは「手」であり、あるいは手にもつ「うちわ」などである。このように、動詞と、その前の助詞と、そしてその前の名詞（全体で一つのシンタクマをつくる）との結合はかなり密接なものであって、この構造を明らかにする必要がある。この研究では動詞のもついくつかの結合手について同一の場で同時に起こる総合的な結合をあつかおうとしている。

このばあい、日本語で特徴的なものは、他動詞の主語は人（あるいはアニメート）であるということである。あとで述べるのであるが、少數の例外がある。しかし日本語全体とすると一つの特質であるといえよう。これは抽象的関係の動詞だけの現象でなく、日本語の動詞すべてに通じていえることである。「もえる」の主語は「火」や「木」であるが、「もやす」のは「人」である。「火」や「木」は他動詞に対しては「を」格で連なる。そしてこのように対応する自動詞の「が」格の前と他動詞の「を」格の前の名詞の前は対応するのである。これも抽象的関係の動詞を含めて、すべての日本語の動詞に見られる現象といえよう（もちろん例外があるが）。そしてこの名詞が、動詞との意味関係をもっともつよくもっているものもある。

ここでこれらの現象をもう少し詳しく説明しよう。まず主体が人間でない他動詞である。受身その他の現象のばあいは、「人間の精神活動を意味する動詞で

の用法」の項でのべたことがその他の動詞すなわち「抽象的関係を意味する動詞」のばあいにもそのままあてはまる。そうではなくて、普通の表現で、他動詞の主語が人間などアニメでないものが少しある。たとえば「含む」とか「もたらす」などである。これらはどちらかというと近代的な表現に属するといえないだろうか。あるいは自動機械などの表現でもそうである。それはともかくとして、とにかくそのような例外があることはたしかである。

自動詞の主語になるものはいろいろであり、語によっても異なる。他動詞との対応のあるものについては前に述べたとおりであるが、自動詞だけの表現のものもある。そのなかには、制限がきびしくワードクラスのはっきりしているもの、意味特徴がはっきりしているものもあるが、そうでないものもある。自動詞のなかには「ある」「いる」「くる」「でる」など使用率の多いものがいくつもあり、それらの伴う名詞のワードクラス、あるいは意味特徴はかなりバラエティに富んでいることはたしかである。今後この点をさらに追及してゆく必要があろう。

動詞の意味と、動詞の Valenz としてとらえられている名詞、すなわち「が」「を」「に」……などの助詞を介してそれにつながっている名詞の意味との間にはさまざまのコレスポンデンスがある。たとえば「現われる」につらなるものはまず visible である。「はじまる」ものは、時間的な性質をもっている。意味特徴上の呼応が動詞と名詞との間にある。「ふえる」「ます」ものは直接数量に關係あることばであるか、あるいは「数えられるもの」「はかれるもの」である。「経つ」などの動詞に対応するものは「時間関係」の名詞である。このことは、特にこの「抽象的関係を意味する動詞の用法」において比較的くわしく取りあげているが、「人間の神活動を意味する動詞」でも当然あるはずのものであり、今後そのような点をほりさげてゆくべきである。なお、動詞に NEG がつくと名詞の性質に変化がおこることがある(1V-21)。この点も興味ある現象であろう。類義・対義のばあいに、名詞に共通する面も生じる(1V-29と1V-30)。

このような意味上の呼応は時に動詞の転義によって失なわれたかに見えることがある。しかしこのようなばあいに少しくわしく考えてみると、動詞の意味

のある性質と、名詞の意味のある性質が一つ上のレベルである呼応をもつてゐることがわかる。その例はいくつか示してある (1V-14, 1V-42 など) が、今後はこのようなメカニズムを更にくわしく明らかにしてゆくべきであろう。

一つの動詞のなかの意味の少しのずれと、それに対応する名詞の種類の差の対応は、やはり多くの動詞に見られる。たとえば人間活動を意味する動詞で、「聞く」のばあい、「を」の前が「講義」「はなし」「人のいうこと」「ニュース」など言語関係の意味の名詞がくるばあいと「生活状態」「道」「条件」などの名詞がくるばあいとでは、動詞の意味に相違が生じている。この種のことは、他の種の動詞にも当然おこるわけである。たとえば「含む」は人が主語のとき口中に入れておくであり、物が含むとき内臓のことになるなど。これをこまかく行なうのは、これらのしごとである。今の段階ではまとめて記述した。

動詞が複合したばあいの支配関係のうごきもまた観察しておく必要がある。たとえば「台所から下女が茶をもってくる」のばあい、「茶を」は「もって」にかかり、「台所から」の「から」は「くる」がもつ支配力がしからしめるものであろう。このように複合したものの支配関係はそれぞれの支配力の複合と考えられるが、それがどのような形をとるか、この研究ではあまり追及していない。これからもしごととして残っている。

グループ1.の「に関する」「について」「に対して」などの、やや形式的なものについては、それが一つの複合した、全体で一つの単位として考えられ、扱いうる、ということは、すでに述べてある通りであるが、ここにまたくりかえしておこう。

以上で見渡しを終って、今後の問題について考えてみたいが、その第一が資料をさらにふやして記述を次第に精密にしていくことであることはいうまでもない。

この「抽象的関係を意味する動詞の用法」においては、現われた用例についてのみ考えたばあい、むしろ他の「自然現象を意味する動詞」や「人間の精神活動を意味する動詞」の方に分類した方がよいものもあるように見受けられる。たとえば「経つ」などのグループは、「自然現象」のグループときわめて近い点

が多く、「脱ぐ」などのグループではほとんど人間の行為に限られている。このような動詞はほかにもあるので、これを再分類してみたらどうかということも考えられよう。この研究は非常に多くの利益と恩恵を『分類語彙表』から受けているが、この研究から、それとは別の分類が考えられそうである。

そうしてそれについてはそのような部分的な修正でなく、もう少し別の原理に立って全く別の見地から分類してみることも、考えられてよいだろう。部分的な修正はかえって全体像をゆがめることもありうるからである。別の原理に立つとすると、この研究からは、動詞の格支配すなわち Valenz を考えることになろう。すなわち動詞を中心とした全用語の分類ということになり、名詞や副詞などは、動詞との関連において位置づけられてもよいように思われる。今までに得られた結果を利用して、次にこれにとりかかってみたいと考えるのである。

というのは、今までの整理が主としてグラマチカル・ルールズの形であったので、言語処理におけるディクショナリーが欠けている。言語処理にはそれに伴わしめなければならないからである。当然のことながら、この両者は言語処理のばあいこまかいところまでよく照応していなければならない。そうして、それがある程度できる位置まで現在きたのである。だから次のしごととすると、この辞書づくりすなわち語彙の記述そのものが、筆者の言語処理の課題となつたのである。これを語彙記述の立場から見ると、今までの作業はすべてその準備作業ということになる。

語彙の記述は、一方で行なっている用語調査の目的そのものもあるから、この作業においては言語処理の研究と用語調査とがようやく完全に一体化することになる。計算言語学を言語学の一つの立場とみる見方に立つならば、計算言語学的な立場からの語彙の観察記述ということになるが、この記述は、従来の国語学の静態的立場からはなれて、言語の運用の面を重視する、動的な、ダイナミックな記述を用意することになろう。これは用語調査の目的そのものにとっても不可欠な重要性をもつものである。

このしごとのあとさらに名詞+コピュラ文、形容詞形容動詞文などの述語の

構造をしらべて、動詞をふくめこれらを総合して述語の構造について明らかにするのも重要であり、データをふやして詳細な記述をするしごとも、これから問題として残されている。

さらによりコンピュータ的な問題としては、これらの成果を利用して、文の構造を解析するプログラムを具体的に作成してゆくことも重要である。そこでそれに関する見通しもここで述べておくとよいであろう。

筆者はこの論文をも含めて動詞の用法について三編の論文を公けにしたことになるが、これらはいずれも一つの動詞についての多様な Valenz を一挙に記述しようとしたもので、「助詞『に』を含む動詞句の構造」のレベルの考え方と一線を画したものである。「助詞『に』」のような考え方では、文の生成あるいは解析にあたって、コンテクスト・フリーの二項のグラマチカル・ルールを使用することになりがちであるが、現在の視点ではそれをさらに進めて、すべての Valenz が一度に扱いうるものとなる。そうすればコンテクスト・センシティブなルールあるいは多項のルールを扱うのと同じ結果になる。方法としてはいろいろ考えられるが、たとえば Woods の“transition network grammar”のようなダイナミックな手法も使うことができよう。

具体的なフローチャートをここに書くことはしても意味のないことであろうから省略するが、手順のごくあらましを書いてみようと思う。

（例文1） グルノーブルでは 雨が 降る

この文の解析はまず末尾の「降る」をとらえる。これら「自然現象を意味する動詞の用法」で記述してあるとおり、「雨」や「雪」が「が」の前にくるというグループにはいっている。あるいはその記述がその中にある。「グルノーブルでは」は「で」格で、場所を示す。「雨が」はオブリガトリーで、「グルーブルで」はオプショナルである。そこでそれぞれの格のレジスターにその内容を書きこめばよいのである。他の格のレジスターはここではふれないか、あるいははじめから無関係である。

このようにいわば CASE のフレームをあらかじめ用意し、解析をすすめながらそこに書きこんでゆくのである。

(例文2) 定量的と定性的ということばも科学でよく使われる

(岩波新書「科学の方法」から)

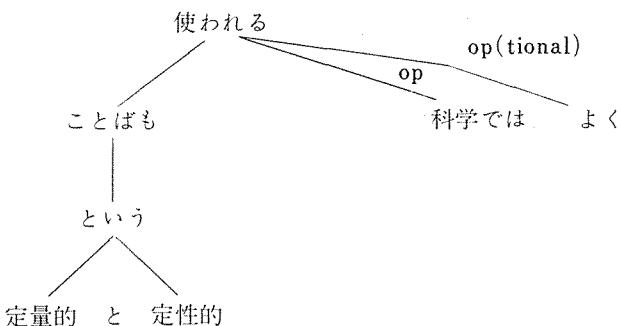
この解析にあたっては「使う」ということばのフレームが使われることになるが、受身になっているので「れる」のとりはずしのことも考えなければならぬ。 「使う」は他動詞で人が主語である。これを、深層構造で



と書き表わすことにする。これはフランス、グルノーブルの機械翻訳研究所で用いてきたノーテーションを借りたものである(あまり忠実ではない)。 (人が)の格は日本語でよく省略する。この格は「使われる」のような格になるとともによく省略される。そこで



のような変形(トランスフォーメーション)を考えることにする。「という」で「ことば」につながる「定量的と定性的」とは、「ことば」にかかる, *épithète*である。「科学では」はオプショナルな要素で、上記のトランスフォーメーションに関与しない(実は「……では」などが表現の上にでやすくなる)。すると、表層構造では

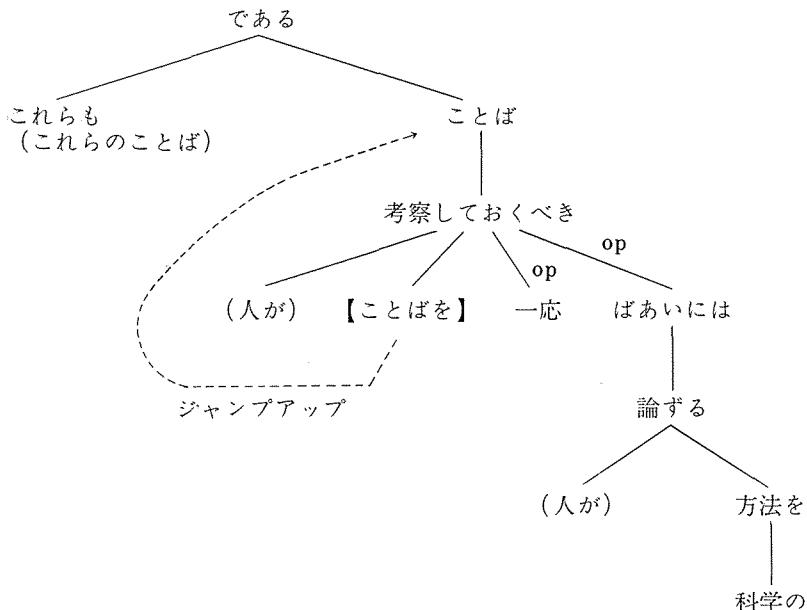


というトリー構造（アルボレッサンス）が得られる。

（例文3）これらも科学の方法を論ずる場合には一応考察しておくべきことばである。（同上）

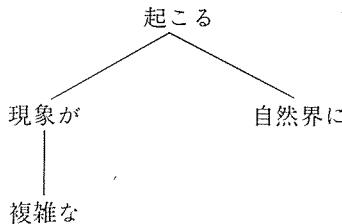
このばあいのアルボレッサンスは図に示すようになろう。

そしてそのばあいの最も大きな問題点は「考察しておくべき」のかかり方のことであるが、これは生成文法の取り扱いのようにサプリメンタルな文「（人が）【ことばを】考察する」というようなものを深層構造で考えるのが便利であろう。この動詞の Valenz は「ヒトガ ナニカヲ」であり、それをあてはめると「人が ことばを 考察する」になるからである。この「考察する」が例文中では「ことばを」にかかってゆくことになっている。ここで生成文法では一つの Deletion を行なうのであるが、別にたとえば連体修飾のジャンプアップ現象として説明することもできよう。ジャンプアップしたばあい、もとの動詞句の「ことばを」の項は空位になる）。このばあいは「を」格のジャンプアップであるが、他の格のこともある。下の「人が科学の方法を論ずるばあいには」の方では「論



する」の「人ガナニカヲ」という Valenz はそのままのこっている。どんなばあいにどのようなジャンプアップが許され、あるいは許されないかは興味多い問題である。動詞や形容詞の連体修飾をこのような立場から整理してみることは必要なことであろう。これもこれから問題として残されている。

このような連体格がどこにかかるかをみると、いわばアンビキュイティを解くときに、このような動詞の Valenz とそのワードクラスについて事実をつきとめておくことが必要である。たとえば「自然界に起っている、ほんとうは複雑な現象を、人間の頭のなかで一つ一つに分析して、そのおののおのについて調べたことが、そのまままた重なり合って、全体の現象の性質を示すかどうかは分らない」（「科学の方法」）というとき、「自然界におこっている」はどこにかかるかというと、機械的にみると次にいくつか出てくる名詞のどれにもかかりうる可能性がある。これを



の連体格のジャンプアップとみると正確な処理が期待できる。すなわち生成文法でいう補文中の表層では空位の主格（または他の格）に連体修飾される名詞を置いて検定するのである。動詞の Valenz だけでなく、その先の名詞などの性質、ワードクラスについても調べておく方がよい理由の一つである。

連体格のもう一つに「名詞₁十の十名詞₂」の形があるが、このようなばあいにも概念間の関係を明らかにすることが必要である。今かりに一つの案として名詞₁のさすものを A、名詞₂のさすものを B とすると、

$A \supset B$

$A \subset B$ (ふつう A の前に形容詞がつく)

$A = B$ (同格)

$A \neq B$

のように分けることもできる。A ≠ Bのなかには、Bが動作性のもの（コンピュータの利用、原則の適用など）とそうでないもの（自然科学の分野、共同利用の方法）とにまず区別できよう。そうでないものは更にくわしく分析すべきであるが、別の機会にゆずることにする。すなわち将来の課題である。もつとも A ⊂ B の型については、すでにいくつかの論文で述べたことがある。

このほかに接続助詞などで結ばれるものの問題がある（南不二男氏の研究がある）。これも大きな問題でたとえば「て」一つとってもなかなか複雑である。これもこれから課題である。副詞と動詞など、連用修飾もとりあげるべきである。文章の関係からみた Valenz なども明らかになるとよい（林四郎氏が研究されている）。

参考文献

「分類語彙表」（国立国語研究所資料集 6、林大氏担当）1964

福渡淑子「連語について（その 1、名詞+「を」+動詞の型）」『情報処理学会
Computaional Linguistics 研究委員会資料』71-3

TAUM 71-Projet de Traduction Automatique de l'Université de
Montréal 1971 (Colmerauer 氏ほか)

G. Veillon : Modèles et algorithmes pour la traduction automatique.
Centre d'Etudes pour la traduction automatique. 1970

C. Rohrer : Funktionelle Sprachwissenschaft und transformationelle
Grammatik 1969.

W. A. Woods : Transition network grammar for natural language
analysis. "Communication of ACM" vol 13, Num. 10 Oct. 1970

朝倉季雄ほか「スタンダード和仏辞典」1970